前書き

『林園月令』は、江戸時代の漢詩人・書家である館柳湾が編纂した書であるが、国会図書館から「ディジタルコレクション」として公開されている。

<http://urx.red/FPwg>

このうち、第一編の「七言絶句」について、「捜韻」を使って復元し、原文の訓読文に従って読み下しを行った。「捜韻」と異なる部分があるが、原文を尊重すること、「捜韻」では読み下せない部分がある事に鑑み、原文に従ったが、部分的に不鮮明なところがあり、適宜補った。語釈は、いずれ着けるつもりであるが、多の作業もあり、同様の研究を行っている方のために公開するものである。

人口に膾炙しているものについては、通常の読み下しにしたが、多は原文に忠実に読み下したと思っている。しかし、作業途中の物であるので、間違いもあるかも知れず、参考資料として利用されたい。

２段階に渡って折りたたんであるが、適宜展開して利用されたい。

（２０２１年１１月３日）

読み下し文を見直すと共に、語釈を追加した。

（２０２３年８月２５日）

# ◆巻一　　春

## ★春郊　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

水遶冰渠漸有聲　　　水は をりて く声有り

氣融煙塢晚來明　　　気は をして 明かなり

東風好作陽和使　　　東風は好く の使をし

逢草逢花報發生　　　草に逢い 花に逢い 生を発するを報ず

【語釈】

○春郊…春の郊外。○冰渠…氷の張った溝。○漸…次第次第に。○煙塢…靄のかかった村落。○晚來…夕方になってから。○東風…春風。○陽和…春天。

## ★南園 　　　　　　 　　唐

花枝草蔓眼中開　　　 眼中に開く

小白長紅越女腮　　　 越女の

可憐日暮嫣香落　　　むべし 日暮 落ち

嫁與春風不用媒　　　春風に するに を用いず

【語釈】

○南園…李賀の故郷、河南省洛陽市宜陽県の南園。○草蔓…草のつる。○越女…越（浙江省）の女。美人が多い。○可憐…感嘆の言葉。ああ。○嫣香…なまめかしい色香。○媒…仲人。

（参考文献）　『漢詩大系　１３』

## ★春日偶題城南韋曲　　　春日 たま城南のに題す　　　唐

韋曲城南錦繡堆　　　 城南 し

千金不惜買花栽　　　千金を惜まず 花を買いてゆ

誰知豪貴多羈束　　　誰か知らん 多くして

落盡春紅不見來　　　春紅を落尽くするも たらず

【語釈】

○韋曲…長安の南にあった地名。○錦繡…錦の刺繍をした織物。○豪貴…極めて三分の高い人。○羈束…拘束。○春紅…春天の花朶。

## ★春晝偶書 　　　　 書す　　　　　　　　　　　宋

白晝偶成芳草夢　　　白昼 成す 芳草の夢

起來幽興有新詩　　　起き来たりて 新詩有り

風簾不動黄鸝語　　　 動かず 語り

坐見庭花日影移　　　坐して見る の の移るを

【語釈】

○幽興…奥ゆかしい興趣。○風簾…窓を覆うカーテン。○黄鸝…コウライウグイス。

## ★春日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宋

黄金蔌蔌滿垂楊　　　黄金 として に満つ

尚有春寒到畫堂　　　尚お の 画堂に到る有り

酒力漸銷歌扇怯　　　酒力　くえ 歌扇 怯ゆ

入簾飛雪带梅香　　　に入る飛雪 を帯ぶ

【語釈】

○黄金…柳の黄色い芽。○蔌蔌…やつれたさま。○春寒…春の初めの残寒。○酒力…酒が人を酔わす力。○漸…次第次第に。○歌扇…歌舞の時に用いる扇。

## ★春日村居 　　　　　　　　　　　　　　　　　宋

春草門前已沒靴　　　春草 門前 已に靴を沒す

更無人過野人家　　　更に 人の の家に ぎる無し

離離細竹時聞雨　　　たる細竹 時に雨を聞き

淡淡輕烟不隔花　　　たる 花をてず

【語釈】

○野人…官に就かず郊外に住む人。○離離…草木の繁茂しているさま。○淡淡…薄いさま。○輕烟…薄い霞。

## ★梁園春　　 　 の春　　　　　　　　　 　　　　金

暖入金溝細浪添　　　は に入りて 添う

津橋楊柳綠纖纖　　　の楊柳 緑 たり

賣花聲動天街遠　　　花を売る声 動いて 遠し

幾處春風揭繡簾　　　幾処の春風 をぐ

【語釈】

○梁園…皇室の庭園。○金溝…宮城の堀。○細浪…さざ波。○津橋…橋梁。○纖纖…か細いさま。○天街…宮城中の道。○繡簾…刺繍をした簾。

## ★西湖春日壯遊即事　　西湖 春日 即事 　　　　　　　　元

要嘱園丁取折枝　　　にめ を取るを要す

紅桃白李紫薔薇

石函橋畔人煙晚　　　 人煙の

挑得春光一擔歸　　　 を げ得て帰る

【語釈】

○西湖…浙江省杭州市の近くにある風光明媚な湖。○壯遊…大志を抱いて遠くへ旅すること。○即事…事に触れてそのままを詠った詩。○石函橋…石造りのアーチ橋。○人煙…炊事の煙。○春光…春景色。春の気配。○擔…担いだ荷物の単位。○挑…担う。

## ★春日幽居　　　　　春日の幽居　　　　　　　　　　　　　　元

淺淺春風尚帶寒　　　たる春風 尚お 寒を帯ぶ

日斜香篆半燒殘　　　日斜めにして 半ばす

杏花一樹開如錦　　　 一樹 開きて錦の如し

怕觸啼鶯不倚闌　　　触るるをれ 闌にらず

【語釈】

○淺淺…そよ風が吹くさま。○香篆…篆書の形をした香。○燒殘…燃え尽きる。○闌…欄干。

## ★山居吟 　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　　　元　　清　珙

滿山筍蕨滿園茶　　　満山の 満園の茶

一樹紅花間白花　　　一樹の紅花 白花にる

大抵四時春最好　　　大抵 春 最も好し

就中尤好是山家　　　 も好きは　是れ 山家

【語釈】

○筍蕨…タケノコと蕨。○四時…四季。

# 正月

## ★城東早春　　　 城東の早春　　　　　　　　　　　　　　唐

詩家清景在新春　　　詩家の清景は 新春に在り

綠柳纔黃半未勻　　　綠柳 黃 にして 半ば からず

若待上林花似錦　　　し 上林花 錦に似たるを待たば

出門俱是看花人　　　門を出ずれば にれ 花をる人ならん

【語釈】

○清景…澄み切った美しい眺め。○嫩…若く柔らか。○色未勻…柳の緑色が浅く、十分色づいていない。○上林…漢の武帝が開いた苑で、転じて天子の御苑。

（参考文献）　『和漢名詞選類評釈』

## ★京中正月七日立春　　正月七日立春 　　　　　　　　　唐

一二三四五六七　　　一二三四五六七

萬木生芽是今日　　　万木 芽を生ずるは 是れ

遠天歸雁拂雲飛　　　遠天の 雲を払って飛び

近水遊魚迸冰出　　　近水の 氷をらせて出ず

【語釈】

○歸雁…北方に帰って行く雁。

## ★早春　　　　　　　早春 　　　　　　　　　　　　　　　　唐

新曆才將半紙開　　　新曆 才に 半紙をて開く

小庭猶聚爆竿灰　　　小庭 猶お む の灰

偏憎楊柳難鈐轄　　　に憎む 楊柳の し難きを

又惹東風意緒來　　　又 東風の をき来たる

【語釈】

○新曆…新しい暦と年。○爆竿…爆竹。新年に爆竹で邪気を払う習慣があった。○鈐轄…司会、統率。○意緒…心意。情緒。

## ★元日 　　　　　　 元日　　　　　　　　　　　　　　　　 唐

戴星先捧祝堯觴　　　星を戴いて 先ず捧ず の

鏡裏堪驚兩鬢霜　　　 驚くに堪えたり 両鬢の霜

好是燈前偷失笑　　　好し是れ　灯前　失笑するをまん

屠蘇應不得先嘗　　　 に 先ず むることを得ざるべし

【語釈】

○祝堯觴…理想の皇帝堯を祝う酒の觴。○應…「まさに～すべし」と読み「必ず～しなければならない」の意。

## ★次韻秦少游元日立春 の「元日の立春」に次韻す　　宋

省事天公厭兩回　　　事を省く をい

新年春日併相催　　　新年 春日 併せてす

殷勤更下山陰雪　　　にす 更に山陰の雪を下して

要與梅花作伴來　　　梅花とをし らんことをす

【語釈】

○次韻…同じ韻字を同じ順序で用いて詩を作ること。○秦少游…秦觀。北宋の文人。高郵（江蘇省）の人。蘇軾の弟子、すぐれた抒情詩を多く残した。○元日立春…元日と立春が重なること。○天公…天（の神）。○兩回…（元日と立春）の両方にやってくる。

## ★探春 　 春をる　　　　　　　　　　　　　　　　宋

雪裏猶能醉落梅　　　 おく 梅に酔う

好營杯具待春來　　　好し 杯具をめ 春のるを待つ

東風便試新刀尺　　　東風 ち 新たに を試み

萬葉千花一手裁　　　 一手にす

【語釈】

○雪裏…雪の中。○東風…春風。○刀尺…衣服を製作する。○裁…裁縫で縫い上げる。

## ★立春　　　　　　　立春　　　　　　　　　　　　　　　　　宋

綵燕雙簪翡翠翹　　　の の

巧裁銀勝試春韶　　　にをちて を試む

東風已到闌干北　　　東風 已に到る 闌干の北

看見嬌黄上柳條　　　見ん のに上るを

【語釈】

○綵燕…燕の模様の彩り。○雙簪…二つのかんざし。○翹…鳥の尾羽。○銀勝…銀箔を人の形に切って飾りとした髪飾り。○春韶…春を告げる。○東風…春風。○嬌黄…なまめかしい黄色。柳の若芽。

## ★立春　　　　　　　　　立春　　　　　　　　　　　　　　　宋　　方　岳

池痕吹皺綠粼粼　　　　 す 緑

才見池痕認得春　　　　かにを見て 春を認め得たり

香沁綵鞭旗脚轉　　　　香はにみて 転ず

自題蘭帖記春新　　　　らに題して春の新たなるを記す

【語釈】

○池痕…池の波。○吹皺…風に吹かれて波が生じること。○粼粼…水がすきとおって石が見えるさま。○綵鞭…彩られた鞭。○旗脚…旗の足。○蘭帖…彩られた紙。

## ★山間早春　　　　　山間の早春 　　　　　　　　　　　　　宋

小桃枝上認年華　　　　を認むれば

隨分紅開一兩花　　　分に従いて 紅は開く 一両花

將謂春風只城市　　　てえり 春風 只だ 城市と

也吹春色到山家　　　た春色を吹いて 山家に到ると

【語釈】

○小桃…桃の一種で早春に咲く。○年華…春光。○一両花…一二の花。○春色…春景色。

## ★早春 　　　　　　 早春　　　　　　　　　　　　　　　　明

春風無力柳條斜　　　春風 力無く 柳條 斜めなり

新草微分一抹沙　　　新草 かに分かつ 一抹の沙

欲向主人借鋤插　　　主人に向って を借り

掃開殘雪種梅花　　　開きて残雪をいて 梅花を種えんと欲す

【語釈】

○鋤插…すき。

# 二月

## ★二月二日   二月二日 　　　　　　　　　　　　　　唐

二月二日新雨晴　　　二月二日 新雨 晴れ

草芽菜甲一時生　　　 菜甲 一時に生ず

輕衫細馬春年少　　　 細馬 春の年 なり

十字津頭一字行　　　十字の 一字に行く

【語釈】

○菜甲…野菜の最初の葉の芽。○輕衫…軽い衣服。○細馬…小型の馬。

## ★吳楚歌詞　　　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

庭前春鳥啄林聲　　　庭前の春鳥 林をむ声

紅夾羅襦縫未成　　　 縫うこと未だ成らず

今朝社日停針線　　　今朝 社日 針線を停め

起向朱櫻樹下行　　　起きて 朱桜に向かい 樹下を行く

【語釈】

○吳楚歌詞…長江中下流一帯の歌。○紅夾…紅色の裏地付き。○羅襦…絹製の短衣。○社日…（春の）祭りの日。

## ★社日　　　　　　 社日　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

鵝湖山下稻粱肥　　　山下 肥ゆ

豚柵雞棲半掩扉　　　 半ば扉をす

桑柘影斜春社散　　　 斜めにして 散じ

家家扶得醉人歸　　　家々 を け得て帰る

【語釈】

○社日…土地神を祀る日。立春後第五の戌の日を春社、立秋後第五の戌の日を秋社という。○鵝湖山…荷湖山ともいう。信州鉛山県、現在の江西省鉛山県にある山。○稻梁肥…晩秋の豊作をいう。梁は穀物。○豚穽…豚を飼っているところ。穽は、穴。豚は坑(あな)で飼われていた。○鷄塒…鶏を飼っているところ。塒は、鳥のねぐら。○桑柘…桑の木。やまぐわ。○影斜…夕暮れをいう語。

（参考文献）　『三体詩』

## ★南浦　　　　 　 　　　 　　　　　　　　　　　宋

南浦東岡二月時　　　 二月の時

物華撩我有新詩　　　物華 我をし 新詩有り

含風鴨綠粼粼起　　　風を含む鴨は 緑にして として起こり

弄日鵝黄裊裊垂　　　日をすは としてる

【語釈】

○南浦…南側の水辺。○物華…自然の景物。○粼粼…水がすきとおって石の見えるさま。○鵝黄…芽吹いた柳。○裊裊…ゆらゆらするさま。

## ★観化　　　　　　 観化　　　　 　　　　　　　　　　　宋

竹笋初生黄犢角　　　 初めて生ず の角

蕨芽已作小兒拳　　　 已に作す 小兒の

試尋野菜炊香飯　　　試みに 野菜を尋ねて 香飯を炊けば

便是江南二月天　　　便ち 是れ 江南 二月の天

【語釈】

○観化…変化を観察する。○竹笋…タケノコ。○黄犢…黄色い子牛。○蕨芽…蕨の芽。○江南…長江下流の南岸地方。

## ★社日獨坐　　　 社日独坐　　　 　　　　　　　　 宋

海棠雨後沁臙脂　　　 雨後 をたし

楊柳風前撚綠絲　　　楊柳 風前 緑糸をる

香篆結雲深院靜　　　 雲を結びて 深院 静かなり

去年今日燕來時　　　去年の今日 燕 来たりし時

【語釈】

○社日…（春の）祭りの日。○臙脂…化粧や絵に使われる赤色の顔料。○香篆…篆書のように曲がった香の煙。○深院…奥深いところにある中庭。

## ★花朝　　　 花朝　　　　　　　　　　　　　　　　　明

晴煙膏露若為容　　　晴煙　 にかずくらん

躑躅香苞望曉紅　　　の を望む

莫怨五更風色惡　　　怨むかれ五更 風色の悪きを

開花原是落花風　　　開花は と是れ 落花の風

【語釈】

○花朝…花朝節。旧暦二月十五日。○晴煙…晴れたかすみ。○膏露…甘露。○若為…如何に。どのようにして。○香苞…良い香りのする花苞。○曉紅…朝焼け。○五更…夜明け前。○風色…風の気配。○原…もともと。

## ★花朝 　　　　　　 花朝　　　　　　　　　　　　　　　　　明

妬花風雨怖難銷　　　花をむ風雨 淚 しし

偶逐晴光撲蝶遙　　　 をいて 蝶をすることかなり

一半春隨殘夜醉　　　一半の春は の酔いにい

卻言明日是花朝　　　って言う 明日 れ 花朝なりと

【語釈】

○花朝…花朝節。旧暦二月十五日。○殘夜…夜が尽きようとするとき。

# ◆巻二　　三月

## ★陌上暮春　　　　　の　　　　　　　　　　　　　　唐

青青南陌柳如絲　　　青々 柳 糸の如し

柳色鶯聲晚日遲　　　 鴬声 日 るること遅し

何處最傷遊客思　　　何れの処か 最もの思いを傷ましむ

春風三月落花時　　　春風 三月 落花の時

【語釈】

○陌上…道の上。○南陌…南側の道路。○遊客…旅人。

## ★晩春　　　　　　　晩春　　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

草樹知春不久歸　　　草樹 春の久しく帰らざるをを知りて

百般紅紫鬬芳菲　　　百般の紅紫 をしむ

楊花榆莢無才思 無く

惟解漫天作雪飛　　　惟だ解し 漫天に雪とりて飛ぶ

【語釈】

○百般…各種各様。○芳菲…花のよい匂い。○楊花…柳絮。○榆莢…ニレの実。○才思…才気と思慮。○解…離ればなれになる。○漫天…満天。空一杯。

## ★春晚題韋家亭子　　春晚 のに題す　　　　　　　　　唐

擁鼻侵襟花草香　　　鼻をし を侵して 花草し

高臺春去恨茫茫　　　 春 去りて 恨み

蔫紅半落平池晚　　　 ば落ちて 平池はれ

曲渚飄成錦一張　　　 えり成す

【語釈】

○韋家…不祥。○擁鼻…鼻を蔽う。○茫茫…果てしないさま。○蔫紅…鮮やかな赤色の花。○曲渚…曲がったなぎさ。○錦一張…錦の旗一つ。

## ★暮春日宴溪亭　　　暮春の日　に宴す　　　　　　　　　　唐

寒食尋芳遊不足　　　寒食 を尋ね 遊びて足らず

溪亭還醉綠楊煙　　　 た酔う の煙

誰家花落臨流樹　　　誰が家にか花は落つ 流れに臨む樹

數片殘紅到檻前　　　数片の残紅 に到る

【語釈】

○溪亭…渓にある亭。○寒食…当時から百五日目。この日と前後の三日間は、火を使わない風習があった。○残紅…散った花。○檻前…欄干の前。

## ★晚春四首　　　　 晚春四首　　 　　　　　　　　　　　　　宋

睡足高簷春日斜　　　 足りて 春日斜めなり

碾聲初破小龍茶　　　 初めて破る の茶

樓邊綠樹飛紅盡　　　楼辺の緑樹 飛びて 尽き

春色牆陰老薺花　　　春色の 老いたり

【語釈】

○高簷…高いノキ。○碾聲…石うすの音。○小龍茶…茶葉を精製して竜の形に丸めた物。○春色…春景色。春の気配。○薺花…ナズナの花。

## ★春晚 　　　　　　 春晚　　　　　　　　　　　　　　　　　 宋

曉風池沼水瀾翻　　　 り

春盡淮南麥秀寒　　　春 尽きて の寒

院落無人日亭午　　　 人無くして 日は

柳花如雪滿闌干　　　 雪の如く に満つ

【語釈】

○水瀾…水の波。○淮南…安徽省の中部。○麥秀寒…麦の伸びるころ不意に来る寒さ。○院落…屋敷の中の中庭。○亭午…正午。○柳花…柳絮。

## ★深春　　　　　　　春をぐる　　　　　　　　　　　　　　　宋

燕子來時春又休　　　燕子 来たる時 春む

暖風吹綠上枝頭　　　暖風 緑を吹いて 枝頭に上る

繡簾不隔荼蘼月　　　 隔たず の月

香影無人自入樓　　　香影 人無く ら 楼に入る

【語釈】

○燕子…家燕。○繡簾…刺繍を施したカーテン。○荼蘼…バラ科の植物。○香影…美しい月の光。

## ★清明日舟次吳門　　清明の日 舟 に次る 　　　　　　　　宋

篷窗恰受夕陽明　　　 も を受けて 明らかなり

楊柳梨花半月程　　　 半月の程

老去不知寒食近　　　 去りて 寒食の近きを知らず

一篙烟水載春行　　　の 春を載せて行く

【語釈】

○清明…淸明節、二十四節気の一つ。春分のあと一五日目、新暦の四月五、六日ごろに当たる。○次…宿泊する、留まる（多くは舟）。○呉門…甘粛省甘谷県。○寒食…冬至から一○五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○一篙…一棹ほどの深さ。○烟水…靄を含んだ水。

（参考文献）　『和漢名詞選類評釈』

## ★清明　　　　　　　清明　　　　　　　　　　　　　　　　　　宋

街頭女兒雙髻鴉　　　街頭の女兒

隨蜂趁蝶學夭邪　　　蜂に従い 蝶をいてを学ぶ

東風也作清明節　　　東風 た 清明節をして

開遍來禽一樹花　　　す 一樹の花

【語釈】

○清明…淸明節、二十四節気の一つ。春分のあと一五日目、新暦の四月五、六日ごろに当たる。○雙髻鴉…髪を左右に分けて角形に結った髪型。あげまき。○夭邪…あやしくよこしまなこと。○東風…春風。○開遍…遍く開く。○來禽…リンゴ。

## ★到江西省看花次韻　江西省に到りて花を看るに次韻す　　　　宋

東湖東畔柳枝長　　　東湖の 長し

滿苑飛花亂夕陽　　　に満つる を乱す

何處祓除兒女散　　　何れの処に を払う 散ずるや

過來流水鬱金香　　　過ぎ来たる 流水

【語釈】

○次韻…同じ韻字を同じ順序で使って詩を作ること。○湖北省武漢市武昌の東郊にある湖。○飛花…柳絮。○祓除…穢れを祓い除く。○鬱金香…ウコンの香り。

## ★清明前一日作 清明前一日の作　　　　　　　　　　　　宋

小窗新綠著枝輕　　　小窓の新緑 枝に著いて し

寒逐東風陣陣生　　　寒は 東風をいて として生まる

燕子不來花落盡　　　は来たらず 花は落ちて尽き

一簾疏雨又清明　　　一簾の 又 清明

【語釈】

○清明…淸明節、二十四節気の一つ。春分のあと一五日目、新暦の四月五、六日ごろに当たる。○東風…春風。○陣陣…とぎれとぎれに続くさま。○燕子…家燕。○一簾…「ひとさめ」で雨の単位。○疏雨…疎らな雨。

# 附録　鶯

## ★和武相公春曉聞鶯　　　武相公の「春曉鶯を聞く」に和す　　　唐

語恨飛遲天欲明　　　語は恨み 飛ぶこと遅く 天 明けんと欲す

殷勤似訴有餘情　　　殷勤に 訴えるに似て 余情有り

仁風已及芳菲節　　　仁風 已に及ぶ の節

猶向花溪鳴幾聲　　　猶お 花溪にいて 鳴くこと幾声

【語釈】

○武相公…不祥。○仁風…恵みを与える風。○芳菲節…花草の盛んな季節。

## ★黃鶯 　　　　　　 　　　　　　 　　　　　　　　　　唐

春雲薄薄日輝輝　　　春雲は 日は

宮樹煙深隔水飛　　　 煙 深くして 水を隔だてて飛ぶ

應爲能歌繫仙籍　　　に 能く歌のにぐるが為に

麻姑乞與女真衣　　　 のを うことを乞うべし

【語釈】

○黃鶯…コウライうぐいす。○薄薄…薄いさま。○輝輝…光輝くさま。○煙…霞。○應…「まさに～すべし」と読み「必ず～しなければならない」の意。○仙籍…仙人世界。○麻姑…神話中の仙女の名。○女真…女道士。

## ★幽齋偶作　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

幽院纔容箇小庭　　　幽院 にる の小庭

疎篁低短不堪情　　　 低短 情に堪えず

春來猶賴鄰僧樹 春来 お の樹に賴りて

時引流鶯送好聲　　　時に 流鶯の 好声を送るを引く

【語釈】

○幽齋…静かな座敷。○幽院…奥深く静かな庭。○

## ★晨炊玉田聞鶯觀鷺　　晨に玉田を炊き鶯を聞き鷺を觀る　　　宋

曉寒顧影惜金衣　　　に 影をて 金衣を惜しむ

著意聽時不肯啼　　　意に著いて 聽く時 肯えて啼かず

飛入柳陰多去處　　　飛びて 柳陰多き処に入りて去る

數聲只許落花知 数声 只だ 許す 落花の知るを

【語釈】

○玉田…美田。○金衣…黄色の鳥の羽。○著意…心にとめる。

## ★黄鶯　　　　　 　　　　　　 　　　　　　　　　　明

栁花如雪滿春城　　　 雪の如く に満つ

始聽東風第一聲　　　始めて聽く 東風 第一声

夢裏江南舊時路　　　 江南 旧時の路

隔溪烟雨未分明　　　溪を隔つる 煙雨に 未だ分明ならず

【語釈】

○黄鶯…コウライうぐいす。○栁花…柳絮。○東風…春風。○夢裏…夢の中。○江南…長江中下流の南岸地帯。○煙雨…霧雨。○分明…はっきりする。

## ★春盡日聞鶯 春尽くる日 鴬を聞く　　　　 明

正愁春去對春風　　　に愁う 春 去りて 春風に対するを

忽聽鶯啼碧樹叢　　　ち聽く 鴬の 碧樹のに啼くを

無數飛花向簾幕　　　無数の飛花 にい

將愁盡入一聲中　　　愁いをって くる 一声の

【語釈】

○簾幕…すだれと幕。

# 燕

## ★烏衣巷　　　　　　烏衣巷　　　　　　　　　　　　　　　 唐

朱雀橋邊野草花　　　 野草の花

烏衣巷口夕陽斜　　　 斜めなり

舊時王謝堂前燕　　　旧時の 堂前の燕

飛入尋常百姓家　　　飛んで の家に入る

【語釈】

○烏衣巷…金陵城（南京）の南側、秦淮区の白鷺洲公園のすぐ西側にある町内の名。○朱雀橋…南京城の南にある秦淮河の上の浮橋の名。○巷口…路地の入り口。○舊時…過ぎ去った昔。○王謝…王導や謝安を出した南朝の名族。○堂前…大きい建物の前。○尋常…普通の。○百姓…庶民。

（参考文献）　　『唐詩三百首』

## ★燕子　　　　　　　燕子　　　　　　　　　　　　　　　　唐

不知大廈許栖無　　　知らず を許すやや

頻已銜泥到座隅　　　りに 已に泥をえて に到る

曾與佳人竝頭語　　　て 佳人と を並べて語り

幾回拋却繡工夫　　　幾回か す 繡工夫

【語釈】

○燕子…家燕。○大廈…広大な房屋。○座隅…座席の傍。○拋却…抛つ。○繡工夫…刺繍に費やす努力と時間。

## ★燕 　　 燕 宋

初見梁間新　　　初めて見る の新たなるを

銜泥已復哺雛頻　　　泥をえ 已にた 雛をすることりなり

只愁去遠歸來晚　　　只だ愁う 去ること遠く 帰来のきを

不怕飛低打著人　　　れず 飛ぶこと低く 人にするを

【語釈】

○梁間…梁の間。○牖戶…屋舎。ここでは燕の巣。○打著…ぶつかる。

## ★燕子辭  の辞　　　　　　　　　　　　　　　明

燕子來時春雨香　　　 来る時 春雨 し

燕子去時秋雨涼　　　 去る時 秋雨 涼し

鴛鴦一生不作客　　　 一生 と作らず

夜夜不離雙井塘　　　離れず に双ぶ

【語釈】

○燕子…家燕。○鴛鴦…オシドリ。○客…旅人。○井塘…わき水のある池。

## ★見燕至 　　　　　 燕の至るを見る　　　　　　　　　　 明

初來如報社前春　　　初めて来たりて 社前に 春を報ずるが如し

好宿茅簷伴客身　　　好し に宿し に伴うに  
莫入江南舊庭院　　　る莫かれ 江南の旧庭院

杏花風雨總無人　　　 風雨 総て人無し

【語釈】

○茅簷…茅吹きののき。○客身…旅人。○江南…長江中下流の南岸地方。○庭院…中庭。

## ★燕 燕 明

繡户珠簾有路岐　　　 に有り

别時嫌早到嫌遲　　　は早きをい 到るは遅きをう

主家只解憐毛羽　　　主家 只だ く毛羽をむ

涴盡雕梁不自知　　　をし尽くせどもら知らず

【語釈】

○繡户…彫刻や絵で飾られた立派な家。○珠簾…玉すだれ。○路岐…道筋の別れたところ。○主家…主人の家。○毛羽…ひな鳥。○雕梁…彫刻を施したはり。

## ★燕 燕 明

暫逐東風別海涯　　　く 東風をいて に別る

去年營壘是誰家　　　去年 塁を営むは 是れ 誰が家ぞ

春光浪信江南好　　　春光 浪にす 江南の好きを

到得江南又落花　　　江南に到り得たれば 又 落花

【語釈】

○東風…春風。○海涯…海辺。○壘…巣のこと。○春光…春景色。○江南…長江中下流の南岸地方。

## ★春日小齋 明

社日方過花正肥　　　社日 に過ぎて 花 正に肥えたり

閑庭亦自長苔衣　　　閑庭 亦た らを長ず

柴屝暫啓元無事　　　柴屝 暫くく 元 事無し

恐有樑間燕子歸　　　恐らくは に の帰る有らんことを

【語釈】

○社日…（春の）村祭りの日。○閑庭…閑かな庭。○苔衣…鮮やかな苔。○柴屝…柴で作った粗末な扉。○燕子…家燕。

# 蝶

## ★蝶　　　　　　　 蝶　　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

壽陽公主嫁時妝　　　 の

八字宮眉捧額黃　　　八字の をす

見我佯羞頻照影　　　我を見て りじ りに影を照らす

不知身屬冶遊郎　　　知らず 身は に属するを

【語釈】

○壽陽公主…南朝の宋の武帝の娘。美人であった。○宮眉…宮中で流行している眉墨の描き方。○額黃…六朝時代の女性がした額に黄色を施す化粧。○照影…鏡の中の像を見る。○冶遊郎…娼婦。

## ★蝴蝶  　　　　　　　　　　　　　　　　 唐

苒苒雙雙拂畫欄　　　 を払う

佳人偸眼再三看　　　佳人 眼をみ 再三 看る

莫**言**翼短飛長近　　　言う莫かれ 翼短くして 飛ぶこと長く近しと

試**向**花間**捉也**難　　　試みに 花間にいて るも た難し

【語釈】

○苒苒…しなやかなさま。○雙雙…つがいのさま。○畫欄…画で飾った欄干。○偸眼…こっそりと見る。

## ★蝴蝶 　　　　　　 蝴蝶　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

栩栩無因繫得他　　　 他をぎ得るにし無し

野園荒徑一何多　　　野園の荒径　えに何ぞ多き

不聞絲竹誰教舞　　　糸竹を聞かず 誰か 舞を教う

應仗流鶯**又**唱歌　　　に の 又 唱歌するにるべし

【語釈】

○栩栩…喜びに満ちた自己満足のさま。○荒徑…荒れた道。○糸竹…管弦。音楽。○應…「まさに～すべし」と読み、「きっと～であるに違いない」の意。○流鶯…木々の間を飛び回るうぐいす。

## ★春日絕句　　　　　春日絕句　　　　　　　　　　　　　　 宋

故園蛺蝶最多種　　　故園の 最も 種 多し

百草長時花亂開　　　百草 長ずる時 花 乱れ開く

窮巷春風元不到　　　 春風 元 到らず

一雙誰遣過牆來　　　一双 誰か を過ぎて来たらしむ

【語釈】

○故園…故郷。○窮巷…行き止まりの小さな道。○一双…ひとつがい。

## ★窗下戲詠　　　　　窓下にて戲れに詠ず　　　　　　　　　　宋

何處輕黄雙小蝶　　　のぞ

翩翩與我共徘徊　　　 我と共にす

綠陰芳草佳風月　　　綠陰 芳草

不是花時也解來　　　れ 花の時ならざるも た く来たる

【語釈】

○輕黄…淡い黄色。○翩翩…身が気軽に飛ぶさま。

## ★蝴蝶 　　　　　 蝴蝶　 　　　　　　　　　　　　　　　 宋

春山處處客思家　　　春山 家を思う

淡日邨煙酒斾斜　　　淡日 村煙 斜めなり

蝴蝶不知人事别　　　蝴蝶は知らず の别れ

繞牆閒弄紫藤花　　　をりて にす

【語釈】

○客…旅人。○酒斾…酒屋の目印の旗。○紫藤花…藤の花。

## ★秋蝶 　　　　　　 秋蝶　　　　　　　　　　　　　　　　 明

欲歇還休却又飛　　　んと欲して ため 却って 又 飛ぶ

芙蓉葉底戀秋暉 芙蓉の を恋う

自知翅粉渾銷盡　　　ら知る て じ尽くすを

羞近尊前舞女衣　　　ず 舞女の衣に近ずくを

【語釈】

○芙蓉…蓮。○秋暉…秋の陽光。○翅粉…ツバサの粉。

# 蜂

## ★蜂　　　　　　　　蜂 　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

不論平地與山尖　　　平地ととを 論ぜず

無限風光盡被占　　　限り無き風光 くめらる

採得百花成蜜後　　　百花をり得て 蜜 成るの後

爲誰辛苦爲誰甜　　　誰が為に辛苦し 誰が為にし

【語釈】

○山尖…山頂。○風光…風景。

★蜂 　　　　　　 　蜂　　　　　　　　　　　　　　　　　　明

花花華華競採花　　　 競いて 花をり

蜜房收課作生涯　　　に課を收めて生涯を作す

知他有甚經綸處　　　知る 他にの の処か有る

也**向**潮時報兩衙　　　た にいてを報ず

【語釈】

○華華…花々。○蜜房…蜜蜂の巣。○課…課税。○經綸…国家を治める意思と才能。○兩衙…二つの役所。

# 蛙

## ★西京道中聞蛙　　にて蛙を聞く　　　　　　　　　唐

雨餘林外夕煙**沈**　　　の林外 沈む

忽有蛙聲伴客吟　　　忽ち のを伴う 有り

莫怪聞時倍惆悵　　　む莫かれ 聞く時 するを

稚圭蓬蓽在山陰　　　が に在り

【語釈】

○西京道…長安を中心とする地方。○雨餘…雨上がり。○夕煙…夕靄。○客吟…旅人の歌。○惆悵…嘆き悲しむ。○稚圭…孔稚珪。南朝齊の会稽山陰の人。都官尚書に至ったが、文と酒を好み、世事を楽しまなかった。○蓬蓽…貧賤の人の住居。

## ★池蛙　　　　　　　池蛙　　　　　　　　　　　　　　　　　宋

越國車前矜勇甚　　　越国の車前 勇にることしく

子陽井底太驕生　　　子陽の井底 だ生をれり

來時不羨雲溟樂　　　来たる時 まず の楽

口作儀同鼓吹聲　　　口にす の声

【語釈】

○越國…越（蘇州）の国。○子陽…東漢の公孫述。王莽の乱の時、蜀で自立したが光武帝に敗れて死亡した。○雲溟…雲が空を覆って暗いこと。○儀同…元勲者を優待して賜った、職務の無い高官。○鼓吹…演奏楽曲。

# ◆巻三　　夏

## ★夏晝偶作　　　　夏昼の偶作　　　　　　　　　　　　 　　唐

南州溽暑醉如酒　　　南州の 酔うこと酒の如し

隱几熟眠開北牖　　　にりて を開く

日午獨覺無餘聲　　　 独りむれば 余声無く

山童隔竹敲茶臼　　　山童 竹を隔てて をく

【語釈】

○夏晝偶作…夏の昼に、たまたま作った詩。○南州…南国の永州、作者が左遷された先の地。○溽暑…蒸し暑いこと。○隠…よりかかる。○几…机。○北牖…北側の窓。○牖…れんじ窓。○日午…正午。○餘声…ほかの物音。丸う茶臼…茶の葉をひいて抹茶にするのに用いるひき臼。

（参考文献）　　『三体詩』

## ★山亭夏日　　　　山亭の夏日 　　　　　　　　　　　　　　　唐

綠樹陰濃夏日長　　　緑樹 陰 やかにして し

樓臺倒影入池塘　　　楼台 影を倒しまにして に入る

水精簾動微風起　　　水精の　動い　て微風起り

滿架薔薇一院香　　　満架の 一院 し

【語釈】

○山亭…山の別荘。○陰濃…木々の葉が生い茂って暗くなっていること。○池塘…大きな池。○一架…棚一杯の。○薔薇…バラ。○滿院…中庭一杯。

（参考文献）　『漢詩鑑賞辞典』

## ★夏日城中作　　　の作　　　　　　　　　　　　　 唐

竹低莎淺雨濛濛　　　竹低れ 莎浅く 雨

**小**檻幽窗暑月中　　　 暑月の中

有境牽懷人不會　　　のをく人 有るも会せず

東林門外翠橫空　　　東林門外 に橫わる

【語釈】

○莎…はますげ。○濛濛…煙るようにもやっとしているさま。○水檻…水のほとりの手すり。○幽窗…静かな窓。○東林…東辺の林。東林寺を指すこともある。○空…大空。

## ★夏日西齋書事 夏日の西齋にて事を書す　　　　　　　　　 宋

榴花映葉未全開　　　 葉に映じ 未だ全くは開かず

槐影沉沉雨勢來　　　 雨勢る

小院地偏人不到　　　小院 地はにして 人到らず

滿庭鳥迹印蒼苔　　　満庭の に印す

【語釈】

○西斎…西側の書斎。○即事…事にふれて、その場に応じて詩を作ること。○榴花…ザクロの花。○槐影…エンジュの木の影。○沈沈…草樹の茂っているさま。○雨勢…あまけ。○地偏…市街から離れていること。○鳥迹…鳥の足跡。○蒼苔…青い苔。○印…印を押したように標す。

## ★夏晝小雨　　　　夏昼の小雨 　　　　　　　　　　　　　　 宋

小牀蘄簟展琉璃　　　小牀 を展べ

窗外新篁一尺圍　　　窓外の 一尺団

正午雲橋疎雨過　　　正午 雲橋 疎雨過ぎ

冬青花上蜜蜂歸　　　冬青 花上 蜜蜂帰る

【語釈】

○小牀…小型の臥具。○蘄竹を編んで作ったむしろ。○新篁…新しい竹。○雲橋……橋のアーチのような雲。○疎雨…まばらな雨。

## ★夏日閒坐　　　　夏日閑坐 　　　　　　　　　　　　　　　 宋

無數山蟬噪夕陽　　　無数の山蟬 夕陽にぐ

高峰影裏坐陰涼　　　 に坐ず

石邊偶看清泉滴　　　 たま看る 清泉のるを

風過微聞松葉香　　　風過ぎて かに聞く の

【語釈】

○閒坐…閑かに坐る。○陰涼…物陰で涼しくて爽やかなところ。○聞…臭いをかぐ。

## ★水軒夏日　　　　水軒夏日　　　　　　　　　　　　　　　　 元

碧窗晝寂幽意長　　　碧窓 昼 として 長し

竹陰滿地琴尊涼　　　竹陰 地に満ち 涼し

輕雷送雨遠不到　　　軽雷 雨を送り 遠く到らず

雪白水花生晚香　　　雪白く 水花 晚香を生ず

【語釈】

○水軒…水辺の家屋。○寂…静かでひっそりしたさま。○幽意…物静かな思。○満地…地面一杯。○琴尊…琴と酒樽、文士が悠閑の生活を送る道具。○輕雷…大きくない雷の音。○雪白…雪のように白い。○晚香…寺院で夕方に焚く香のようなかおり。

## ★己未夏日雜興　　 夏日雜興　　　　　　　　　　　　　 元

中庭日午橘花開　　　中庭 日午 開く

蜂蝶何知故故來　　　 くに知りて に来たる

一陣南薰生殿角　　　一陣の に生じ

亂飄香雪點蒼苔　　　る香雪 乱れて に点ず

【語釈】

○雜興…さまざまな感興。○南薰…南風。○殿角…殿堂の角。○香雪…白色の花。○蒼苔…青い苔。

## ★夏日　　　　　　夏日　　　　　　　　　　　　　　　　　　 明

綠蔭松蘿暑氣涼　　　緑蔭 暑気涼し

清泉瀉入小池塘 清泉 ぎ入る 小池塘

人**閑**晝永無聊賴　　　人 に 昼 永くして 無し

一朵荷花滿院香　　　の 満院 ばし

【語釈】

○松蘿…サルオガセ。○池塘…池。○無聊賴…安んじたことによることがない。○朵…花の付いた枝。○滿院…中庭一杯。

## ★夏日偶成　　　　夏日偶成　　　　　　　　　　　　　　　 淸

深院塵消散午炎　　　深院 塵 消えて 午炎散じ

篆煙如夢晝淹淹　　　 夢の如く 昼

輕風似與荷花約　　　軽風 と約するに似たり

為送香來自捲簾　　　為に 香を送り来りて らを捲く

【語釈】

○偶成…たまたま作った詩。○深院…奥まった中庭。○午炎…昼の暑さ。○篆煙…篆字のように曲がって立つ香煙。○淹淹…気力のないさま。○荷花…蓮の花。

# 四月

## ★初夏戲題　　　　初夏 戯に題す　　　　　　　　　　　　　　唐

長養薰風拂曉吹　　　の を払いて吹き

漸開荷芰落薔薇　　　く を開きて を落とす

青蟲也學莊周夢　　　青虫 た の夢を学びて

化作南園蛺蝶飛　　　化して 南園の と作りて飛ぶ

【語釈】

○長養…長大。○薰風…なごやかで暖かい風。○漸…次第次第に。○荷芰…蓮と菱。○莊周夢…「荘子」の故事。夢の中で、蝶になり、夢から覚めたとき、夢の中の自分が現実か、現実のほうが夢なのか分からなくなったという説話。○南園…南の園。

## ★夏日　　　　　　  夏日　　　　　 　　　　　　　 唐

庭樹新陰葉未成　　　庭樹の新陰 葉 未だ成らず

玉階人靜**下簾**聲　　　玉階 人 静かにして を下す声

相風不動烏龍睡　　　相風 動かず　 睡る

時有幽禽自喚名　　　時に の から名を喚ぶ 有り

【語釈】

○新陰…新しい枝葉によってできた木陰。○玉階…玉でできたきざはし。○相風…風向きを観測する機械。○烏龍…犬。○幽禽…姿を見せない鳥。

## ★初夏　　　　　　　 初夏　　　　　　　　　　　　　 宋

首夏清和新雨晴　　　 清和 新たに 雨 晴る

綠莎細軟不妨行　　　 にして を妨げず

園夫遮道白何事　　　 道を遮り 何事をかす

梔子花開斑笋生　　　 花開き 生ずと

【語釈】

○首夏…初夏。旧暦四月。○清和…天気が清明で暖いこと。○綠莎…緑のハマナスゲ。○梔子…クチナシ。○斑笋…まだらだけ。

## ★初夏即事　　　　　 初夏即事　　　　　　　　　　　　宋

石梁茅屋有彎碕　　　 有り

流水濺濺度兩陂　　　流水 をる

晴日暖風生麥氣　　　晴日 暖風 を生じ

綠陰幽草勝花時　　　緑陰 幽草 花に勝さる時

【語釈】

○石梁…石橋。○茅屋…茅葺きの家。○彎碕…曲がった岸。○濺濺…水が勢いよく流れるさま。○兩陂…両岸の土手。○麥氣…麦の穂を渡る風の香り。麦の伸びる陰暦四月頃の気候。○花時…花が咲き誇る頃。

（参考文献）　　『漢詩鑑賞辞典』

## ★早夏 　 　 早夏 　 宋

安石榴花猩血鮮　　　安石 かに

凉荷高葉碧田田　　　の

鰣魚入市河豚罷　　　 市に入りて む

已**是**江南打麥天　　　已に是れ 江南 の天

【語釈】

○安石榴花…石榴の花。○猩血…鮮やかな紅色。○凉荷…涼しげな蓮の葉。○田田…水草の広い葉が水に浮かんでいるさま。○鰣魚…ニシン科の回遊魚。○河豚…フグ。○江南…長江中下流の南岸地方。○打麥…麦を刈り入れて打つ時節。

## ★小滿　　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　 元

子規聲裏雨如煙　　　子規声裏 雨 煙の如し

潤逼紅綃透客氈　　　いて にり をす

映水黃梅多半老　　　水に映ずる黃梅 半ば老いたる多し

鄰家蠶熟麥秋天　　　 は熟す の天

【語釈】

○小滿…二十四節気の第８。五月二十一日ころ。○子規…ホトトギス。○煙…靄。

○紅綃…赤色の絹織物。○客氈…旅寝の布団。○黃梅…熟して色づいた梅。○麥秋…陰暦四月。

## ★山居首夏　　　　　 山居首夏　　　　　　　　　　 元

東風滿意綠週遭　　　東風 意に満ち 緑

乍著單衣脫敝袍　　　ち をて を脱す

最愛晚涼新浴罷　　　最も愛す 晚涼 新たに浴しみて

坐看春筍過林高　　　坐して看る の 林に過ぎて高きを

【語釈】

○首夏…夏の初め、初夏、孟夏。○東風…春風。○週遭…あたり一面。○滿意…意に満ちる。心から満足する。○単衣…ひとえの着物。○敝袍…破れどてら。○春筍…春の筍。

## ★初夏　 　　　　　　　　　 初夏　　　　　　　　　　　　　 明

黄鸝啼暖隔江村　　　 啼くこと 暖かにして 江村を隔て

嫩綠團陰暗小門　　　 小門に暗し

昨夜茅簷雷過雨　　　昨夜 雷 雨を過ごす

階前添鸝籜龍孫　　　階前 添う 箇の

【語釈】

○高鸝…コウライうぐいす。○江村…水辺の村。○嫩綠…新緑。○茅簷…萱葺きののき。○階前…きざはしの前。○籜龍孫…竹。

## ★四月八日永安禪院期超無 　四月八日にを期す　 明

清朝不見小彌天　　　 見ず

竹塢炊茶過午煙　　　 茶を炊き 午にる煙

解是雨花新浴彿　　　解す 是れ 雨花　新たにに浴するを

諸天誰供洗児錢　　　諸天 誰か供す

【語釈】

○永安禪院…不祥。○超無…李至清。常州府江陰の人、四方を遊学し、名士と交流があった。○清朝…清らかな夜明け。○彌天…高い志を持つ人。○竹塢…竹で囲まれた家。○雨花…満天の花。釈迦が説法すると満天の花が降り注いだと言う故事。○浴彿…四月八日、釈迦の誕生日に釈迦像を香辛料で洗う習慣。○諸天…天界の仏の守護神。○洗児錢…子供が生まれた時にお祝いに贈られるお金。

## 

## ★初夏　　　　　　  初夏　　　　　　　　　　　　　　　　　明

庭院薰風枕簟清　　　庭院の薰風 清し

海榴初發雨初晴　　　 初めて発らき 雨 初めて晴る

香銷夢斷人無那　　　香 じ 夢 断え 人 ともする無し

聽得新蟬第一聲　　　聽き得たり 新蟬の第一声

【語釈】

○庭院…中庭。○薰風…温和な風。○枕簟…枕とたかむしろ。○海榴…ザクロ。

# 五月

## ★夏日宴九華池　　　夏日にに宴す　　　　　　　　　 唐

池上涼臺五月涼　　　池上の 五月 涼し

百花開盡水芝香　　　百花 開き尽くし し

黃金買酒邀詩客　　　黃金 酒を買い をえ

醉倒檐前青玉牀　　　す 青玉の牀

【語釈】

○九華池…不祥。○水芝…蓮の花の別名。○醉倒…泥酔して倒す。○檐前…ノキの前。○詩客…詩を共にする客。○青玉…緑色の蓮の葉。

★五月與和叔同遊齊安 　　五月 とにす　　　　　宋

繰成白雪桑重綠　　　成して 白雪をり 桑 重ねて緑なり

割盡黄雲稻正青　　　く 黄雲をきて 稲 正に青なり

他日玉堂揮翰手　　　他日 玉堂 翰をう手

芳時同此賦林坰　　　 同じく に にす

【語釈】

○邢恕…和叔。鄭州陽武の人。毀誉褒貶を重ねた。○齊安…広東省江門市恩平市。○白雪…白い花びらのこと。○黄雲…成熟した麦稲の形容。○他日…昔日。○玉堂…宮殿。○揮翰…筆で書を書く。○芳時…花の開く時節。○林坰…郊外の林。

★臨平道中　　　　　 　　　　　　　　　　　　　宋

風蒲獵獵弄輕柔　　　 をし

欲立蜻蜓不自由　　　立たんと欲する 自由ならず

五月臨平山下路　　　五月 山下の路

藕花無數滿汀洲　　　 無数 に満つ

【語釈】

○臨平…杭州の江西県にある山の名。○風蒲…風に吹かれる蒲の葉。○獵獵…風の吹く声。○軽柔…軽く柔らかなさま。○蜻蜓…とんぼ。○藕花…蓮の花。○汀洲…なぎさと中州。

（参考文献）　『漢詩大系　１６』

## ★揚州端午呈趙帥　　の端午にに呈す　　　　　　　 宋

榴花角黍鬭時新　　　 を闘わしむ

今日誰家不酒樽　　　今日 誰が家か あらず

堪笑江湖阻風客　　　笑うに堪えたり 江湖 風に阻まるる

却隨蒿艾上朱門　　　却って に隨いて　朱門に上る

【語釈】

○揚州…江蘇省揚州市。○端午…陰暦五月五日の節句。○趙帥…趙という姓の師、不祥。○榴花…ザクロの花。○黍鬭…ちまき。○時新…そのとき新しく出た品、はしり。○蒿艾…よもぎ。○朱門…高位高官のやしき。

## ★夏直 　　　　　 夏直　　　　　　　　　　　　　　　　　　金

玉堂睡起苦思茶　　　玉堂にしに茶を思う

別院銅輪碾露芽　　　別院の銅輪 露芽をす

紅日轉堦簾影薄　　　紅日 堦に転じ 薄く

一雙蝴蝶上葵花　　　一双の蝴蝶 に上る

【語釈】

○夏直…夏の宿直。○玉堂…宮殿。○睡起…眠りより起きる。○別院…主たる建物で無い建物。○銅輪…銅製の挽き臼。○露芽…茶の名前。○碾…挽いて粉にする。○紅日…赤い太陽の光。○一雙…ひとつがい。

## ★村居　　　　　　 村居　　　　　　　　　　　　　　　　　　金

五月南風化蟪蛄　　　五月 南風 を化し

野塘晚筍未成蒲　　　の 未だ蒲を成さず

檉花落盡紅英細　　　 落ち尽くして 紅英細く

沙渚鴛鴦半引雛　　　の 半ば を引く

【語釈】

○蟪蛄…ニイニイ蝉。○野塘…野原にある池沼。○晚筍…タケノコの一種で地上に出る前に掘り出されるもの。○檉花…カワヤナギの柳絮。○紅英…紅花。○沙渚…砂の渚。○鴛鴦…オシドリ。

## ★書吾尹扇　　　　　が扇に書す 　　　　　　　　　　　 明

溪頭古樹靜垂隂　　　の古樹 静かにを垂れ

溪水盈盈不受塵　　　 塵を受けず

五月江南新雨歇　　　五月 江南 新雨みて

晩風多少納凉人　　　晩風 多少 納凉の人

【語釈】

○吾尹…不祥。○溪頭…渓のほとり。○盈盈…水の満ちているさま。○江南…長江中下流の南岸地方。○多少…多い。

# ◆巻四　　六月

## ★香山避暑　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　　唐

六月灘聲如猛雨　　　六月 猛雨の如し

香山樓北暢師房　　　香山 楼北 の房

夜深起凭闌干立　　　夜 け 起きて 闌干にりて立てば

滿耳潺湲滿面涼　　　耳に満つる に満つる涼

【語釈】

○灘聲…岩にぶつかる早瀬の音。○香山…香山寺。○暢師…香山寺の高僧の一人、文暢禅師をいう。○潺湲…水の流れる音。

（漢詩大系１２）

## ★香山避暑　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　　唐

紗巾草履竹疎衣　　　の草履 の衣

晚下香山踏翠微　　　に香山を下りて を踏む

一路涼風十八里　　　一路 涼風 十八里

臥乘籃轝睡中歸　　　して に乗り に帰る

【語釈】

○香山…香山寺、洛陽の寺の名。○紗巾…薄絹の頭巾。○竹疎衣…竹の繊維を織って作った衣。晚下…日暮れ。翠微…山の八合目。籃輿…竹を編んで作った籠。

（参考文献）　『新釈漢文大系　白氏文集十一』『和漢名詞選類評釈』

## ★夏雨後題青荷蘭若　　夏雨の後 に題す　　　　　　　 唐

僧舍清涼竹樹新　　　僧舍 清涼にして 竹樹 新たなり

初經一雨洗諸塵　　　初めて一雨をて を洗う

微風忽起吹蓮葉　　　微風 ち起りて を吹き

青玉盤中瀉水銀　　　青玉盤中に 水銀をぐ

【語釈】

○青荷…緑色の蓮の葉。○蘭若…仏教寺院。○青玉盤…碧綠色の蓮の葉の比喩。○水銀…光る露の比喩。

## ★文殊院避暑　　　　 　　　　　　　　　　　　　　唐

赤日黃埃滿世間　　　 世間に満つ

松聲入耳即心閑　　　松声 耳に入りて 即ち 心 閑かなり

願尋五百仙人去　　　願わくは 五百仙人を尋ねて去りて

一世清涼住雪山　　　一世 清涼 雪山に住せん

【語釈】

○文殊院…四川省成都市文殊院。○赤日黃埃…俗世間の煩わしさの比喩。○五百仙人…不祥。

## ★夏日書依上人壁　　 夏日 の壁に書す　　　　　　　 南唐

門外塵飛暑氣濃　　　門外 塵 飛んで 暑気濃し

院中蕭索似山中　　　院中 　山中に似たり

最憐煮茗相留處　　　最も憐れむ を煮て まる処

疎竹當軒一榻風　　　 軒に当たる の風

【語釈】

○依上人…不祥。○院中…僧院の中。○蕭索…もの寂しいさま。○疎竹…まだらな竹林。

## ★暑中閑詠 　　　 暑中閑詠　　　　　　　　　　　　　　　北宋 ·

嘉果浮沈酒半醺　　　嘉果 浮沈し 酒半ばず

床頭書冊亂紛紛　　　の 乱れて

北軒涼吹開疎竹　　　北軒の を開き

卧看青天行白雲　　　して看る 青天 白雲の行くを

【語釈】

○嘉果…美味な果実。○醺…ほろ酔い。○書冊…書籍。○紛紛…混じり、乱れ合うさま。○北軒…北側ののき。○涼吹…涼しい風。○疎竹…疎らに生えた竹。

## ★六月二十七日望湖樓醉書 六月二十七日望湖楼の酔書 北宋 ·

黑雲翻墨未遮山　　　黒雲 墨をして 未だ 山をらず

白雨跳珠亂入船　　　白雨 珠を跳らせて 乱れて船に入る

卷地風來忽吹散　　　地を卷き 風来たって ち吹き散ず

望湖樓下水如天　　　 水 天の如し

【語釈】

○望湖楼…浙江省杭州市西湖このほとりにあった楼。○醉書…酒に酔った勢いで作った詩。○翻墨…墨をぶちまける。○白雨…夕立の白く見える雨滴。

（参考文献）　『漢詩鑑賞辞典』

## ★村行　　　　　　村行　　　　　　　　　　　　　　　　　　　金

棗花初落路塵香　　　 初めて落ち　し

燕掠麻池乍頡頏　　　燕は をめてち す

一片雲陰遮十頃　　　一片の をり

賣瓜棚下午風涼　　　 午風涼し

【語釈】

○麻池…麻の生えた池。○頡頏…鳥が上下するさま。○一片…満天。ひとひら。○雲陰…雲影。

## ★崇義院雜題　　　の 　　　　　　　　　　　　　 明

六月門前暑似炊　　　六月 門前 暑 たるに似たり

殿堂深處未曾知　　　殿堂 深き処 未だ曽て知らず

晚凉浴罷思歸去　　　晚凉にしみて 帰り去さんと思えど

更為松風佇少時　　　更に 松風の為に むこと 少時

【語釈】

○崇義院…江西省贛州市にあった寺。○晩涼…夕方の涼しさ。○少時…しばしの間。

## ★暑夜 　暑夜 明

此夜炎蒸不可當　　　此の夜 当るべからず

開門高樹月蒼蒼　　　門を開けば 高樹 月

天河只在南樓上　　　天河は 只だ の上に在り

不借人間一滴涼　　　借さず に 一滴の涼

【語釈】

○炎蒸…蒸し暑さ。○不可當…耐えられない。敵わない。○蒼蒼…月の青白い色の形容。○天河…天の川。○人間…人間社会。

（参考文献）　　『和漢名詞選類評釈』

# 附録　　杜鵑

## ★泛舟入後溪 　舟をべ に入る 唐

雨餘芳草淨沙塵　　　 芳草 浄し

水綠灘平一帶春　　　水 緑に 灘 平かにして 一帶の春

唯有啼鵑似留客　　　唯だ の を留るに似たる有り

桃花深處更無人　　　桃花 深き処 更に 人無し

【語釈】

○後溪…不祥。○雨餘…雨上がり。○灘…早瀬。○啼鵑…鳴くホトトギス。○客…旅人。

## ★山中　　　　　　　山中　　　　　　　　　　　　　　　　 唐

野人愛向山中宿　　　野人 山中にいて するを愛す

況在葛洪丹井西　　　や の西に 在るをや

庭前有箇長松樹　　　庭前 のの樹 有り

夜半子規來上啼　　　夜半 子規 来たりて 上に啼く

【語釈】

○野人…官に就かず郊外に住む人。○丹井…仙薬の丹を練るときに使う水のある井戸。○葛洪丹井…西晋・東晋時代に練丹術を会得したとされる葛洪が、仙薬の丹を練るときに使った水のある井戸。江蘇省鎮江市にあるとされる。○子規…ホトトギス。

## ★聞子規 　　　　 　子規を聞く　　　　　　　　　　　　　 唐

蜀魄千年尚怨誰　　　 千年 尚お 誰をか怨む

聲聲啼血向花枝　　　声々 血に啼いて に向う

滿山明月東風夜　　　満山 明月 東風の夜

正是愁人不寐時　　　正に 是れ 寐らざる時

【語釈】

○子規…ホトトギス。○蜀魄…ホトトギス。○東風…春風。

## ★子規　　　　　　 子規　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

暮春滴血一聲聲　　　暮春 血はる 一声々

花落年年不忍聽　　　花落ち 年々　聽くに忍びず

帶月莫啼江畔樹　　　月を帯びて　江畔　樹に啼く莫かれ

酒醒遊子在離亭　　　酒 醒さめて 遊子 離亭に在り

【語釈】

○子規…ホトトギス。○遊子…旅人。

## ★夜聞子規 夜 子規を聞く 宋

幽林欲雨氣含凄　　　幽林 雨ふらんと欲して 気はを含む

春晚端居園徑迷　　　春晚 迷う

獨向高齋展衾卧　　　独り にいてを展じてす

南山夜夜子規啼　　　南山 夜々 子規啼く

【語釈】

○幽林…奥深く静かな林。○凄…すさまじさ。○端居…家の端に坐ること。○園徑…庭園の道。○高齋…高雅な書斎。○子規…ホトトギス。

## ★過真陽峽　　　　 をぐ　　　　　　　　　　　　 宋

仰見青天尺許青　　　仰ぎ見る青天 の

無波江水不勝平　　　波無くして 江水 平かなるにえず

只驚白晝山竹裂　　　只だ驚く 白昼 裂け

杜宇初聞第一聲　　　 初めて聞く 第一声

【語釈】

○真陽峽…不祥。○尺許…？○杜宇…ホトトギス。

## ★鄉村四月　　　　　鄉村の四月　　　　　　　　　　　　　　宋

綠遍山原白滿川　　　緑 山原に遍く 白 川に満つ

子規聲裡雨如烟　　　子規声裏 雨 煙の如し

鄉村四月閒人少　　　郷村 四月 閑人少

纔了蠶桑又插田　　　に をりて 又 田をす

【語釈】

○即景…見たままの風景を詠った詩。○子規…ホトトギス。○蠶桑…春の養蚕。○插田…田植え。

## ★夏日雜興 　　　　 　　　　　　　　　　　　　　 元

纖纖碧草與階齊　　　たる 階とし

濃綠陰中杜宇啼　　　 啼く

花院晝長聽**正**好　　　花院 昼長く聽きて 正に好し

帶聲飛過粉牆西　　　声を帯びて 飛び過ぐ の西

【語釈】

○雜興…さまざまな感興。○纖纖…細いさま。か細いさま。○階…きざはし。○杜宇…ホトトギス。○花院…花木を育成する園。○粉牆…白く塗った塀。

# 蝉

## ★聽蟬　　　　　　　蝉を聽く　　　　　　　　　　　　　　唐

噪蟬聲亂日初曛　　　 声乱れて 日 初めてず

絃管樓中永不聞　　　楼中 永く聞かず

獨奈愁人數莖髮　　　り んせん 愁人 数茎の髮

故園秋隔五湖雲　　　故園 秋は隔つ 五湖の雲

【語釈】

○噪蟬…うるさい蟬。○絃管…音楽。○奈…どうしよう。反語。○数茎…数本。○故園…故郷。○五湖…太湖（江蘇省南部と浙江省北部の境界にある湖）を中心とする湖。

## ★蟬 　 蝉 　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

天地工夫一不遺　　　天地の 一もさず

與君聲調借君緌　　　君に声調を与え 君にを借す

風棲露飽今如此　　　 今 の如し

應忘當年滓濁時　　　応に忘るなるべし 当年 の時

【語釈】

○聲調…音楽の節奏。○緌…蟬の管状の口。○風棲…風の中に住む。○露飽…露に飽きる。○應…「まさに～すべし」と読み「きっと～であるに違いない」の意。○當年…昔年。○滓濁…小さくて卑しい（幼虫）。

## ★新蟬 　　　　　 　新蝉　　　　　　　　　　　　　　　　宋

寂寂宮槐雨乍晴　　　たる 宮槐 雨 ち晴れ

高枝微带夕陽明　　　高枝 かに を帯びて るし

臨風忽起悲秋思　　　風に臨みて ち起こす 悲秋の思

獨聽新蟬第一聲　　　独り聽く 新蝉の第一声

【語釈】

○寂寂…寂しく静かなさま。○宮槐…槐樹。

## ★聞蟬　　　　　　　蝉を聞く　　　　　　　　　　　　　　 宋

近交紙薄雲翻手　　　近交 紙のごとく薄くして 雲 手を翻えし

舊夢冠空雪滿顛　　　旧夢 冠に空しく 雪 に満つ

却憶畫船曾聽處　　　却って憶う 画船 て聽きし処

夕陽高柳斷橋邊　　　 高柳 断橋の

【語釈】

○近交…近い者との交わり。○雲翻手…杜甫「貧交行」。○雪滿顛…頭のてっぺんが白髪になる。○画船…絵で飾った船。○斷橋…壊れた橋。

## ★聽蟬 　蝉を聞く　　　　　　　　　　　　　　 宋

說露談風有典章　　　露に説き 風に談じて 有り

詠秋吟夏入宮商　　　秋に詠じ 夏に吟じて に入る

蟬聲無一**添**煩惱　　　蝉声 一つのを 添える無し

自是愁人枉斷腸　　　ずから是れ 愁人 げて断腸

【語釈】

○典章…法則。○宮商…音律。○枉…ことさらに。

## ★風柳鳴蟬 　　　　　　　　　　　　　　　　　　金

輕明雙翼曉風前　　　軽明の の前

一曲哀箏續斷絃　　　一曲の 断絃を続く

移向別枝誰畫得　　　移りて 別枝にいて 誰か 画き得ん

只留殘響客愁邊　　　只だ 残響を留む の辺

【語釈】

○輕明…薄くて透明。○哀箏…哀れで妙なる琴の音。○斷絃…音が切れて途絶えること。○客愁…旅の愁。

## ★聞蟬 　　蝉を聞く　 元

短翼含風薄似秋　　　 風を含み 薄きこと 秋に似たり

一聲聲帶夕陽愁　　　一声 声は　を帯びて 愁う

年年古柳官塘路　　　年々 古柳 の路

催得行人白盡頭　　　をし得て をす

【語釈】

○年年…毎年。○官塘…公共の堤。○行人…旅人。○白盡…真っ白にする。

# 蛍

## ★螢　　　　　　　　螢　　　　　　　　　　　　　　　　　 唐

水殿清風玉戶開　　　水殿の清風 玉戶を開けば

飛光千點去還來　　　飛光 千点 去りて た 来たる

無風無月長門夜　　　無風 無月 の夜

偏到階前點綠苔　　　えに　階前に到りて に点ず

【語釈】

○水殿…水に臨んだ殿堂。○玉戸…玉で飾った戸。○長門…長門宮。漢の武帝の寵愛を失った陳皇后が住んだ宮殿。○階前…きざはしの前。

## ★螢　　　　　　　　螢　　　　　　　　　　　　　　　　　 唐

裴回無燭冷無煙　　　 燭 無く 冷たく 煙 無し

秋逕莎庭入夜天　　　 に入る

休向書窗來照字　　　書窓に向って 来たりて 字を照らすをめよ

近來紅蠟滿歌筵　　　近来 に満つ

【語釈】

○裴回…徘徊。彷徨。○秋逕…秋の道。○莎庭…ハマナスゲの咲いた庭。○書窗…書斎。○近来…近ごろ。○紅蠟…赤い灯。○歌筵…歌を伴った酒宴の席。

## ★夜齋見螢　　　　　夜齋 螢を見る 明

拂竹緣莎復㸃苔　　　竹を払い にじて た 苔に点ず

夜窓無月見飛來　　　夜窓 月無く 飛び来たるを見る

舊書亂後**多**抛却　　　旧書 乱れて後 多くす

懶就微光更展開　　　微光にいて 更に 展開するにし

【語釈】

○夜齋…夜の書斎。○莎…ハマナスゲ。○舊書…古い書物。○抛却…ほったらかしにする。○微光…螢の微かな光。○展開…書物を広げる。

## ★蛍 　　　　　　　蛍　　　　　　　　　　　　　　　　　　　明

腐朽如何不自量　　　 んぞ ら量らざる

化形飛起便悠揚　　　形を化し 飛起して ちたり

臍間只有些兒火　　　 只だ 些兒火 有り

月下星前少放光　　　月下 星前 少しく光を放つ

【語釈】

○腐朽…腐り朽ちる。○悠揚…遠く遙かなさま。時間の長いさま。○臍間…へそ状になっている物の間。○些兒火…僅かな光。

# ◆巻五　　秋

## ★秋夕　　　　　　　 秋夕　　　　　　　　　　　　　　　　 唐

護霜雲映月朦朧　　　 雲に映じ 月

烏鵲爭飛井上桐　　　 争い飛ぶ の桐

半夜酒醒人不覺　　　半夜 酒 むれば 人 えず

滿池荷葉動秋風　　　満池の 秋風に動く

【語釈】

○護霜…方言で露を結ぶこと。○朦朧…おぼろげなさま。○烏鵲…カササギ。○井上…井戸の上。○人不覺…人影がない。○荷葉…蓮の葉。

## ★秋詞 　   唐

自古逢秋悲寂寥　　　り 秋に逢い を悲しむ

我言秋日勝春朝　　　我は言う 秋日は春朝に勝ると

晴空一鶴排雲上　　　晴空 一鶴 雲を排して上り

便引詩情到碧霄　　　ち 詩情を引いて に到る

【語釈】

○秋思…樂府題。普通は旅情、別離の意を含むが、ここでは、秋についての感想という意味。○自古…昔から。○便…たちまち。○碧霄…青空。

（参考文献）『漢詩鑑賞辞典』

## ★涼思　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 唐

松間小檻接波平　　　の 波に接して平かなり

月澹煙沉暑氣清　　　月 く 煙 沈んで 暑気清し

半夜水禽棲不定　　　半夜 水禽　み定まらず

綠荷風動露珠傾　　　 風に動いて 傾く

【語釈】

○涼思…涼しさの思い。○小檻…小さなおばしま。○煙…水面に立つ靄。○半夜…まよなか。○水禽…水鳥。○棲…ねぐら。○綠荷…緑の蓮の葉。○風動…風で揺れ動く。○露珠…露の玉。

## ★秋江寫望 　 　　　　　　　　　　　　　　 宋

蒼茫沙嘴鷺鷥眠　　　たる 眠る

片水無痕浸碧天　　　 痕無く 碧天をす

最愛蘆花經雨後　　　最も愛す 蘆花 雨をたる後

一篷烟火飯魚**船**　　　の煙火 魚船に飯するを

【語釈】

○寫望…眺めた光景を詠った詩。○蒼茫…青々として広いさま。○嘴鷺…砂洲の突き出た角。○鷺鷥…シラサギ。○片水…水たまり。○一篷…一つの舟の窓。○烟火…炊飯の煙。

（参考文献）　『漢詩大系　１６』

## ★禾熟　　　　　　　 熟す　　　　　　　　　　　　　　　 宋

百里西風禾黍香　　　百里の西風 ばし

鳴泉落竇穀登場　　　鳴泉 より落ちて に登る

老牛粗了耕耘債　　　老牛 ぼ す の

齧草坡頭臥夕陽　　　草をみ にす

【語釈】

○禾…稲。○西風…秋風。○禾黍…稲とキビ。○場…脱穀場。○耕耘債…田を耕す仕事のノルマ。○坡頭…丘の上。

（参考文献）　『宋詩選注』（東洋文庫）

## ★秋日田家 　秋日の 　　　　　　　　　　　　　 宋

淘漉溝源築野塘　　　をい を築く

滿坡烟草卧牛羊　　　の煙草 牛羊 す

今年且喜輸官辦　　　今年 つ喜ぶ 官に弁するを 輸するを

豆莢繁多粟穗長　　　 繁ること多く 長し

【語釈】

○淘漉…浚渫。○野塘…野原の池。○満坡…丘に満ちる。○煙草…靄に包まれた草。○輸官…政府に納める。○豆莢…豆のさや。

## ★秋日西湖 　　　 　秋日の西湖　　　　　　　　　　　　　  宋

飛來雙鷺落寒汀　　　飛来たる に落ち

秋水無痕玉鏡清　　　秋水 痕無く 清し

疏蓼黄蘆宜掩映　　　 にし

沙邊危立太分明　　　に危立しだ 分明

【語釈】

○雙鷺…つがいのサギ。○寒汀…寒々とした渚。○玉鏡…珠の鏡のような水面。○疏蓼…疎らなタデ。○黄蘆…枯れて黄ばんだアシ。○掩映…覆いかくす。○危立…すっきりと立つ。○分明…はっきりとしている。

## ★秋日西湖 　　　　 秋日の西湖 　　　　　　　　　　　　  宋

西風夜半捲庭槐　　　西風 夜半 を捲く

臥聽鄰翁曉圃開　　　して聽く の 曉にを開くを

稚子相呼入林去　　　 相呼びて 林に入りて去る

應知病果落莓苔　　　に 病果の に落ちるを 知るなるべし

【語釈】

○西湖…浙江省杭州市の近くにある風光明媚な湖。○西風…秋風。○稚子…幼児。○應…「まさに～すべし」と読み「きっと～に違いない」の意。○病果…病気にかかった果実。○莓苔…青苔。

## ★田間秋日　　　　　の秋日　　　　　　　　　　　　　 金

禾穗纍纍豆角稠　は 豆角は**し**

崧前村落太平秋の村落 太平の秋

熈熈多少豐年意　 多少 豊年の意

都在農家社案頭て農家 のに在り

【語釈】

○禾穗…稲穂。○纍纍…重なり続くさま。○豆角…豆の実。○崧前…大きくて高い山の前。○熈熈…やわらぎ楽しむさま。○多少…多い。○社案…土地の神の神社。

## ★代呻吟絕句　　　　に代わる　絕句　　　　　　　　　　元

蘆花方褥竹方床　　　の 竹の

葛帳含風薤簟涼　　　 風を含み 涼し

夜半起來山月白　　　夜半 起来すれば 山月白し

滿天清露灑衣裳　　　満天の清露 衣裳にぐ

【語釈】

○方褥…四角なしとね。○竹方床…竹で出来た寝台。○葛帳…葛布のとばり。○薤簟…にらで作ったむしろ。

## ★秋行　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 明

野菜香粳樂晩年　　　野菜 晩年を楽しむ

疎林晴日好秋天　　　疎林 晴日 好秋の天

風瓢滿耳鳴琴筑　　　 耳に満ち 鳴る

黄葉深窩得晏眠　　　黄葉の を得たり

【語釈】

○香粳…ジャスミン米。○風瓢…瓢箪の形をした風鈴。○琴筑…琴と筑（竹の棒で叩いて音を出す琴に似た楽器）。○深窩…奥深いところにあるすみか。○晏眠…安眠。

# 七月

## ★初秋　　　　　　　初秋　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

不覺初秋夜漸長　　　覚えず 初秋 夜 く長きを

清風習習重淒涼　　　清風 をす

炎炎暑退茅齋靜　　　炎々たる暑 退き 静かなり

堦下叢莎有露光　　　の 露光 有り

【語釈】

○漸…次第次第に。○習習…風がそよそよと吹くさま。○淒涼…うら寂しいこと。○炎炎…非常に暑いさま。○茅齋…茅葺きの書斎。○堦下…きざはしの下。○叢莎…ハマナスゲの草むら。

## ★七夕 　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

今日雲軿渡鵲橋　　　今日 を渡る

應非脈脈與迢迢　　　に ととに 非らざるべし

家人競喜開妝鏡　　　家人 競喜して を開き

月下穿針拜九霄　　　月下に 針を穿ちて を拝す

【語釈】

○雲軿…神仙（ここでは織女）が乗る雲でできた車。○鵲橋…カササギが天の川に架ける橋。○脈脈…続いて絶えないさま。○迢迢…遙かに遠いさま。○妝鏡…化粧に用いる鏡。○九霄…高天。

## ★到秋 　秋に到る　　　　　　　　　　　　　　　唐

扇風淅瀝簟流灕　　　 として り

萬里南**雲**滯所思　　　万里の南雲 所思をらす

守到清秋還寂莫　　　守りて 清秋に到れば た 寂莫

葉丹苔碧閉門時　　　葉はく 苔はなり 門を閉じる時

【語釈】

○扇風…扇を振ることで起こる風。○淅瀝…哀れに寂しい。○簟流…？○所思…思うこと。○寂莫…ひっそりとしてもの寂しいさま。

## ★秋登涔陽城　　　　秋 に登る　　　　　　　　　　 唐

穿針樓上閉秋煙　　　 秋煙 閉じ

織女佳期又隔年　　　織女の佳期 又 年を隔つ

斜漢夜深吹不落　　　斜漢 夜深く 吹けども落ちず

一條銀浪挂秋天　　　一條の銀浪 秋天にかる

【語釈】

○穿針樓…漢の時代から七夕の前日に宮女が七孔針を刺すという習慣があり、南朝齊の武帝がこの習慣にちなんで建てた楼閣。○秋煙…終日の煙霞。○織女…織り姫。○佳期…牽牛と会う良い日。○斜漢…斜めに懸かる銀河。○銀浪…白く光る波。

## ★七夕　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

年年七夕渡瑤軒　　　年々 る

誰道秋期有淚痕　　　誰かう 秋期 淚痕有りと

自是人間一週歲　　　れり の一週歲

何妨天上只黃昏 何ぞ妨げん 天上 只だ なるを

【語釈】

○瑤軒…仙人（ここでは織女）が乗る車。○秋期…七夕。○人間…人間世界。○一週歲…一年。○黃昏…たそがれ。

## ★題南禪院壁　　　 の壁に題す　　　　　　　　　　　宋

秋林落葉已斑斑　　　秋林 落葉して 已に

秋日當庭尚掩關　　　秋日 庭に当たりて 尚お をう

掃榻晝眠聽鳥語　　　をいて 昼眠し 鳥語を聽く

可憐身世此時閒　　　憐むべし 此の時の

【語釈】

○南禪院…不祥。○斑斑…点々とあるさま。○掩關…門を閉ざす。○榻…寝台。○可憐…感嘆の言葉。ああ。○身世…一生。

## ★七夕口占　　　　　の 　　　　　　　　　　　　　　 宋

三秋靈匹此宵期　　　三秋 を期す

萬古傳聞果是非　　　万古 伝え聞く して か非か

免俗未能還自笑　　　俗をるること 未だわず って ら笑う

金針乞得巧絲歸　　　に を乞い得て帰る

【語釈】

○口占…紙に書かずに作った即興の詩。○三秋…秋の三ヶ月。○靈匹…神霊の配偶。牽牛と織女。○万古…大昔より。○巧絲…針仕事の巧みなこと。

## ★初秋夜凉　　　　　初秋夜凉　　　　　　　　　　　　　　 金

小蟲機杼月西廂　　　小虫はにして 月は

風雨纔分半枕涼　　　風雨 かに分つ の涼

白髪自疎河漢夢　　　白髪 ら 疎にして 河漢の夢

一瓶秋水玉簮香　　　一瓶の秋水 し

【語釈】

○機杼…機織り機。○西廂…西のひさし。○分…分け与える。○半枕…枕半分。○河漢…銀河。○玉簪…玉簪花。ギボウシ。

## ★早秋 　 早秋 　　　　　　　　　　　　　　元

昨朝一葉見秋生　　　昨朝 秋の生ずるを見る

今日千巖萬壑清　　　今日 清し

欲借西風蘇病骨　　　西風を借りて 病骨をえらせんと欲し

暫來石上聽松聲　　　く 石上に来たりて 松声を聽く

【語釈】

○千巖萬壑…多くの山々。○西風…秋風。○病骨…病気の身。

## ★初秋夜坐 　初秋の夜坐　　　　　　　　　　　　　 元

夜深庭院寂無聲　　　夜深くして 庭院 として声無し

明月流空萬影橫　　　明月 空に流れ 万影 橫わる

坐對荷花兩三朵　　　に対して坐す

紅衣落盡秋風生　　　紅衣 落ち尽くして 秋風生ず

【語釈】

○庭院…中庭。○荷花…蓮の花。○兩三朵…二三の花の付いた枝。○紅衣…蓮の花の花弁。

## ★初秋夜坐　　　　　初秋の夜坐　　　　　　　　　　　　　 元

月明如水侵衣溼　　　月明 水の如く 衣を侵してう

臺榭沈沈秋夜長　　　 秋夜長し

坐久高僧禪語罷　　　坐 久しくして 高僧 禅語み

澹然相對玉簪香　　　 相対してし

【語釈】

○臺榭…楼台等の建物。○沈沈…夜が更けてゆくさま。○澹然…静かで安らかなさま。○玉簪…玉簪花。ギボウシ。

## ★秋景 　　　　　　 秋景　　　　　　　　　　　　　　　　 明

新秋涼露濕荷叢　　　新秋の をし

不斷清香逐曉風　　　断えざる清香 をう

滿目濃華春意在　　　満目の 春意在り

晚霞澄錦照芙蓉　　　晚霞 芙蓉を照らす

【語釈】

○涼露…冷たい露。○荷叢…一面の蓮の葉。○濃華…盛んに茂っている綺麗な花朶。○春意…春ののどかな心持ち。○晚霞…夕映え。○澄錦…？

## ★新秋示盛伯宣　　　新秋 に示す　　　　　　　　　　明

暑退新涼透碧紗　　　 退きて新涼 にる

砧聲不斷是誰家　　　 絶えざるは れ が家ぞ

酒醒小立殘陽裏　　　酒 め す 残陽の

閑數籬邊紫豆花　　　に数う

## ★秋日雜興　　　　秋日雜興　　　　　　　　　　　　　　　　明

紫蔓青藤各一叢

野人籬落管西風　　　野人の 西風をす

郊扉遠絶誰能到　　　 し 誰かく到らん

秋日蟲鳴豆葉中　　　秋日 虫は鳴く の

【語釈】

○紫蔓…紫色のつる草。○青藤…青い藤の花。○野人…官に就かないで郊外に住む人。○籬落…垣根。○西風…秋風。○郊扉…郊外の住宅。○遠絶…遠く離れる。

# ◆巻六　　八月

## ★和元郎中從八月十一至十五夜翫月五首　　　　　　　　　　　唐

が八月十一従り十五夜に至り月をぶに和す　五首

半秋初入中旬夜　　　半秋 初めて 中旬に入る夜

已向堦前守月明　　　已ににいて 月明を守る

從未圓時看却好　　　未だ ならざる時り 看て 却って好し

一分分見傍輪生　　　 に見る にいて生ずるを

【語釈】

○元郎中…不祥。○翫月…月をめでる。○半秋…旧暦八月。○堦前…きざはしの前。○一分…一部分。○傍輪生…何かを囲むように生じる。

## ★和元郎中從八月十一至十五夜翫月五首　　　　　　　　　　　唐

が八月十一従り十五夜に至り月をぶに和す　五首

亂雲遮却臺東月　　　乱雲 す 台東の月

不許教依次第看　　許さず をして 次第に看せることを

莫爲詩家先見鏡　　詩家の為に 先ず 鏡を見ること莫かれ

被他籠與作艱難　　他に せられて 艱難を作さん

【語釈】

○元郎中…不祥。○翫月…月をめでる。○遮却…完全に遮る。○台東…楼台の東。○籠與…？○艱難…困難。

## ★和元郎中從八月十一至十五夜翫月五首  　 唐

が八月十一従り十五夜に至り月をぶに和す　五首

今夜月明勝昨夜　　　今夜 月明 昨夜に勝る

新添桂樹近東枝　　　新たにを添え 東枝に近し

立多地濕舁牀坐　　　立つこと多く 地は湿り 牀にれて坐ず

看過牆西寸寸遲　　　す に 寸々遅きを

【語釈】

○元郎中…不祥。○翫月…月をめでる。○桂樹…月にあるという桂の木。○看過…見過ごす。○牆西…垣根の西方。○寸寸…少しずつ。

## ★和元郎中從八月十一至十五夜翫月五首 唐

  が八月十一従り十五夜に至り月をぶに和す　五首

月似圓來色漸凝　　　月は 円に似来たりて 色くる

玉盆盛水欲侵稜　　　 水を盛りて をさんと欲す

夜深盡放家人睡　　　夜 深くして　 家人を放ちて睡る

直到天明不炷燈　　　直ちに 天明に到りて 灯をせず

【語釈】

○元郎中…不祥。○翫月…月をめでる。○漸…次第次第に。○玉盆…玉の盆。付きのこと。○天明…夜明け。○炷燈…灯をともす。

## ★和元郎中從八月十一至十五夜翫月五首　　　　　　　　　　　唐

 　　　が八月十一従り十五夜に至り月をぶに和す

合望月時常望月　　　に月を望む時 常に月を望み

分明不得似今年　　　分明に 今年に似たるを得ず

仰頭五夜風中立　　　を仰げて 五夜 風中に立つ

從未圓時直到圓　　　円ならざる時り 直ちに円に到る

【語釈】

○元郎中…不祥。○翫月…月をめでる。○分明…はっきりと。○五夜…五更。夜明け前。

## ★八月　　　　　　　 八月　　　　　　　　　　　　　　　　 唐

徙倚仙居遶翠樓　　　する をらす

分明宮漏靜兼秋　　　分明なる に秋をぬ

長安夜夜家家月　　　長安 夜々 家々の月

幾處笙歌幾處愁　　　の笙歌 にか愁う

【語釈】

○徙倚…徘徊する。○仙居…清浄で超俗の住まい。ここでは宮城。○翠樓…緑色の楼閣。○宮漏…宮廷の水時計。

## ★中秋月 　中秋の月　　　　　　　　　　　　　　 唐

王母粧成鏡未收　　　王母 成りて 鏡 未だ收めず

倚欄人在水精樓　　　にる 人は在り 水精楼に

笙歌莫占清光盡　　　 清光を占め尽くすこと莫かれ

留與溪翁一釣舟　　　せよ の一釣舟に

【語釈】

○王母…西王母。○水精樓…水晶で飾った楼。○笙歌…吹笙唱歌。○留與…分け与えてやる。

## ★仲秋八日雲臺觀群花盛開　　　　　　 　　　　　　　　　　 宋

仲秋八日 雲台に群花の盛んに開くを観る

春早凡花百種榮　　　春早 凡花 百種栄ゆ

秋芳能得幾多名　　　秋芳 能く得たり 幾多の名

仙家八月靈葩發　　　仙家 八月 発す

不與尋常俗艷爭　　　 と争わず

【語釈】

○仲秋…陰暦八月。○雲臺…陝西省華山の雲台峰上にある道觀。○凡花…平凡な花。○秋芳…秋に咲く花。特に菊花。○仙家…仙人の家。雲台のこと。○靈葩…珍奇な花。○俗艷…俗気のある濃艶な色。

## ★中秋登望海楼　　　中秋 に登る　　　　　　　　　　 宋

目窮淮海兩如銀　　　目 窮わめて つながら 銀の如し

萬道虹光育蚌珍　　　万道の を育す

天上若無修月戸　　　 天上 し 無くば

桂枝撐損向西輪　　 桂枝 せん 西に向う輪

【語釈】

○中秋…陰暦八月。○望海楼…不祥。○目窮…見渡す限り。○淮海…淮河（安徽省と江蘇省を流れる川）と海。○虹光…虹の輝き。○蚌珍…珍しいはまぐり。○修月戸…月を修める家。○桂枝…桂の木の枝。○撐損…支えて壊す。○輪…月のこと。

## ★中秋前偶成　　　　中秋前の偶成　　　　　　　　　　　　　元

空林月落大如盤　　　空林 月 落ちて 大なること 盤の如し

雞犬無聲曉氣寒　　　雞犬 声無く 寒し

童子儗謀朝一食　　　童子 朝一食を らんとし

玉杯盛得露漙漙　　　玉杯 盛り得たり 露

【語釈】

○中秋…陰暦八月。○偶成…たまたま作った詩。○空林…人気の無い林。○曉氣…曉の気。○玉杯…杯の美称。○漙漙…露が多いさま。

## ★山水小景 山水の小景　　　　　　　　　　　　　　元

秋滿西山爽氣多　　　秋は 西山に満ち 多し

山人帷箔卷煙蘿　　　山人の を卷く

清溪只在雲林外　　　清溪は 只だ の外に在り

夜半月明聞櫂歌　　　夜半 月明 を聞く

【語釈】

○爽氣…爽やかな空気。○山人…山に隠棲している人。○帷箔…とばりと簾。○煙蘿…靄のこめたツタ。○雲林…隠居の所。○櫂歌…舟歌。

## ★山中秋夜　　　　 山中の秋夜　　　　　　　　　　　　　　宋

石床彈月鶴聽琴　　　石床 月に弾じて 鶴 琴を聽き

玉宇凝秋絶點塵　　　玉宇 秋をらして をす

萬里無雲銀漢淡　　　万里 雲無く 銀漢淡し

一天風露溼星辰　　　一天の風露 星辰をす

【語釈】

○石床…坐ったり寝たりするときに使う石製の用具。○彈月…月明かりの下で琴を弾く。○玉宇…佳麗な宮殿。大空。○凝…完全なものにする。形作る。○點塵…小さな埃。○銀漢…天の川。○風露…雨と霧。○星辰…星。

## ★早雁 　早雁 明

涼霜八月塞天寒　　　涼霜 八月 寒し

飛度衡陽楚水寬　　　飛び度る のきを

少婦樓頭初掩瑟　　　 初めてをい

一行先向夕陽看　　　 先ず に向かって看る

【語釈】

○塞天…辺塞の地の空。○衡陽…衡山（湖南省衡陽市にある五岳の一つ）の南のこと。衡山の南にある回雁峰は険しい峰で、雁かりがやって来ても、これを越えて南下することはできないと言われる。「衡陽雁断」。○楚水…楚の地方の川。○瑟…大琴。○一行…雁の一つの行列。

## ★社中　　　　　　　社中 　　　　　　　　　　　　　　　　 明

桑林伐鼔酒如川　　　 を伐ち 酒 川の如し

秋社錢多春社錢　　　の銭は の銭より多し

盡道昇平長官好　　　くう 長官好しと

五風十雨更年年　　　五風 十雨 更に年々

【語釈】

○社中…土地の神の氏子。○桑林…殷の皇帝が伝えたという楽曲の名。○秋社…秋祭り。○春社…春祭り。○昇平…太平の世。○五風十雨…五日ごとに風が吹き、十日ごとに雨が降る。風雨の順調なさま。

## ★秋日雜興　　　　　秋日の雜興　　　　　　　　　　　　　　明

寒螿啼斷槿園空　　　 啼き断えて 空し

萬樹凋傷八月中　　　 す 八月の

只有南山蒼桂在　　　只だ 南山のの在る有りて

一株花發向秋風　　　 花いて に向う

【語釈】

○寒螿…深秋に鳴く虫。○槿園…木槿の園。○凋傷…草木が凋み枯れること。

## ★秋日雜興六首　　　秋日の雜興 　　　　　　　　　　　　　 明

柏林楓岸迥宜看　　　 かにして 看るにろし

楊栁芙蓉不禁寒　　　楊栁 芙蓉 寒にえず

最愛高樓好明月　　　最も愛す 高楼の好明月

莫教長笛倚闌干　　　長笛をして に らしむることかれ

【語釈】

○雜興…色々な感興。○柏林…柏の木の林。○楓岸…楓の植えてある岸。○長笛…管楽器。長さ一尺四寸。

# 九月

## ★九日田舍　　　　　の　　　　　　　　　　　　　 唐

今日吾家野興偏　　　今日 吾が家 し

東籬黃菊映秋田　　　東籬の黃菊 に映ず

浮雲暝鳥飛將盡　　　浮雲 飛んで に尽きんとす

始達青山新月前　　　始めて達す 青山 新月の前

【語釈】

○九日…九月九日。○田舍…田舎の家。○野興…自然の景色に対する感興。○東籬…東のまがき。（陶淵明「飲酒其の五」）。

## ★秋園戲題 　　　　 秋園 に題す　　　　　　　　　　 唐

傷秋不是惜年華　　　秋をむは 是れ を惜しむにあらず

別憶春風碧玉家　　　別に憶う 春風 の家

強向衰叢見芳意　　　強いて にいてを見る

茱萸紅實似繁花　　　 に似たり

【語釈】

○年華…年月。○碧玉家…緑色の玉のような立派な家。○衰叢…生気の衰えた草叢。○芳意…春意。○茱萸…カジカミ。○繁花…盛んに咲いている花。

## ★晚秋閑居　　　　 晚秋の　　　　　　　　　　　　　　唐

地僻門深少送迎　　　地はに 門は深く 送迎 なり

披衣閑坐養幽情　　　衣をき に坐し 幽情を養う

秋庭不埽攜藤杖　　　秋庭 わず を携え

閑蹋梧桐黃葉行　　　閑かに 黃葉を蹋みて行く

【語釈】

○閑居…世間との交わりをやめ、煩わされることなく、心静かに住むこと。○地僻…その場所が辺鄙である。○閑坐…静かに坐る。○幽情…心の奥底に潜んでいる気持ち。○藤杖…フジの木で作られたつえ。○梧桐…あおぎり。○黄葉…もみじ葉。

（参考文献）　　『新釈漢文大系　白氏文集（三）』

## ★重陽席上賦白菊　　重陽席上 白菊を賦す 　 唐

滿園花菊鬱金**香**　　　満園の花菊

中有孤叢色似霜　　　中にの色 霜に似たる有り

還似今朝歌酒席　　　た 似たり の歌酒の席に

白頭翁入少年場　　　白頭翁は入る 少年の場

【語釈】

○重陽…九月九日。重陽の節句。○鬱金香…ウコンの香り。○孤叢…ぽつんとした叢がり。○今朝…今日。○白頭翁…白髪頭の老人。○少年場…若者の集う所。

（参考文献）　『新釈漢文大系　白氏文集　十』

## ★宮詞 　 宮詞 　　　　　　　　　　　　　唐

銀瓶瀉水向朝妝　　　 水をぎに向う

燭焰紅高粉壁光　　　 の光

共怪滿衣珠翠冷　　　共に怪しむ 満衣 の 冷やかなるを

黃花瓦上有新霜　　　 に 新霜有り

【語釈】

○朝妝…朝化粧。○燭焰…灯の炎。○紅高…赤く高いさま。○粉壁…白色の囲い壁。○珠翠…翡翠の珠。○黃花…黄色い菊。

## ★重九會光化二園  　 に会す　　　　　　　　 宋

誰言秋色不如春　　　誰か言う 秋色 春にかずと

及到重陽景自新　　　に到るに及びて 景 自ずから新たなり

隨分笙歌行樂處　　　分に隨いて 笙歌 行楽する処

菊花萸子更宜人　　　菊花 更に人にし

【語釈】

○重九…九月九日。重陽の節句。○光化二園…不祥。○秋色…秋景色。○笙歌…音楽と歌。○萸子…須臾。カジカミ。

## ★白菊　　　　　　　白菊　　　　　　　　　　　　　　　　　宋

濃露繁霜著似無　　　 の無きに似たり

幾多光彩照庭除　　　幾多の光彩 を照らす

何須更待螢兼雪　　　何んぞん 更に 螢と雪とを待つを

便好叢邊夜讀書　　　便ち好し 夜 書を読むに

【語釈】

○濃露…濃い露。○繁霜…厚い霜。○庭除…中庭。○叢邊…草叢のあたり。

## ★山居吟　　　　　　山居の吟 　　　　　　　　　　　　　　 元

半窗斜日冷生光　　　半窓の斜日 冷たく光を生ず

破衲蒙頭坐竹床　　　 にり 竹床に坐す

枯葉滿鑪燒焰火　　　 に満ち を焼く

不知屋上有寒霜　　　知らず 屋上に 有るを

【語釈】

○半窗…窓半分。○斜日…夕陽。○破衲…破れた衣。○蒙頭…頭に被る。○焰火…炎を出す火。○寒霜…冷たい霜。

## ★秋深村況　　　　　　　　　　　　　　　　　　　明

農休事簡人多醉　　　農 み 事 なく 人 多く酔い

風靜秋深蟲獨喧　　　風 に 秋 く 虫 独りし

城市自然閑客少　　　城市 自然 し

過時不見款柴門　　　時を過ぎて見ず 柴門をくを

【語釈】

○村況…村の様子。○城市…城郭で囲まれた町。○閑客…暇な旅人。○柴門…柴で作った粗末な門。

## ★秋深村況　　　　　　　　　　　　　　　　　　　明

近交誰復是良朋　　　 誰かた 是れ

一半山人一半僧　　　一半は山人 一半は僧

落葉滿階風自掃　　　落葉 階に満ち 風 ずからう

危樓乘興月同登　　　危楼 興に乗じて 月 同じく登る

【語釈】

○村況…村の様子。○近交…近くの人との交わり。○良朋…好友。○一半…半分。○山人…山に隠棲している人。○危樓…高楼。

## ★秋深村況　　　　　　　　　　　　　　　　　　　明

天氣秋高正泬寥　　　天気 秋高く に

海風雖急不終朝　　　海風 急なりとも朝をえず

幾畦叢菊如雲爛　　　の 雲の如く たり

兩岸蘆花似雪飄　　　両岸の蘆花 雪のるに似たり

【語釈】

○村況…村の様子。○泬寥…空の清涼で広いさま。○海風…海から吹く風。○幾畦…多くの畦。○叢菊…叢がって咲く菊。○爛…鮮やかなさま。

## ★泊長蕩　　　　　　にす 　　　　　　　　　　　　　 明

蒹葭一望暮蒼蒼　　　 一望 暮に

長蕩湖頭煙水長　　　 煙水長し

怪道今朝楓葉盡　　 す の尽くるを

夜來七十二橋霜 夜来 七十二橋の霜

【語釈】

○蒹葭…オギとヨシ。○暮…夕方。○蒼蒼…青々としていること。○長蕩湖…不祥。○煙水…水面に立つもや。○怪道…不思議に思う。○楓葉…楓の葉。○夜来…夜になってから。○七十二橋…多くの橋。

# 附録　雁　鴻

## ★歸雁 　　　　　　 帰雁　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

瀟湘何事等閑回　　　より 何事ぞ にる

水碧沙明兩岸苔　　　水 に かなり 両岸の苔

二十五弦彈夜月　　　二十五弦　に弾ずれば

不勝清怨却飛來　　　に　えずして　却って　飛び来たらん

【語釈】

○瀟湘…瀟水と湘水が合流する洞庭湖南の地。○等閑…なおざりにすること。○二十五弦…瑟。大琴。○清怨…美しいもののあわれ。○却飛來…飛び戻る。來は助字で意味が無い。

## ★夜泊詠棲鴻 　　　　夜泊してを詠ず　　　　　　　　　唐

可憐霜月暫相依　　　むべし く るを

莫向衡陽趁隊飛　　　に向う隊をいて 飛ぶこと莫かれ

同是江天寒夜客　　　同じく 是れ 江天 の

羽毛單薄稻粱微　　　羽毛 にして なり

【語釈】

○棲鴻…棲み着いているヒシクイ。○可憐…感嘆の言葉。ああ。○霜月…霜の夜の寒い月。○衡陽…湖南省衡陽市。その北側に衡山の南にある回雁峰があり、それを超えることはできないと言われた（衡陽雁断）。○江天…長江と空。○羽毛…皮の衣。○單薄…少なくて薄い。○稻粱…穀物の総称。

## ★題新鴈　　　　　　 に題す　　　　　　　　　　　　　　唐

暮天新鴈起汀洲　　　暮天の よりつ

紅蓼花開水國秋　　　花開く 水国の秋

想得故園今夜月　　　い得たり 故園 今夜の月

幾人相憶在江樓　　　幾人か いて 江楼に在る

【語釈】

○汀洲…中洲。○紅蓼…紅色の蓼。○故園…故郷。○江樓…江に臨んだ楼。

## ★聞雁　　　　　　　 雁を聞く　　　　　　　　　　　　　　　唐

接影橫空背雪飛　　　影を接し 空に橫わり 雪をいて飛ぶ

聲聲寒出玉關遲　　　声々 寒くして を出ずること 遅し

上陽宮裏三千夢　　　 三千の夢

月冷風清聞過時　　　月は冷やかに 風は清し ぐるを聞く時

【語釈】

○玉關…玉門関。○上陽宮…唐の高宗が洛陽に建てた宮殿。

## ★春半聞歸雁 　　　　春半ばにして帰雁を聞く　　　　　　　宋

春光深淺沒人知　　　春光の深浅 人の知るし

我正南歸雁北歸　　　我は に 南に帰り 雁は 北に帰る

頭上一聲如話別　　　頭上一声 別かれをするが如し

一生長是背人飛　　　一生 長く是れ 人にいて飛ぶ

【語釈】

○春光…春景色。

## ★四雁圖 　　　　　 四雁の図　　　　　　　　　　　　　　　元

江北江南秋正驕　　　江北 江南 秋 にる

孤飛萬里氣方豪　　　孤り万里を飛び 気 に豪なり

平生慣有冰霜翼　　　平生 の 翼に慣るる有りて

卻笑東風燕雀高　　　って笑う 東風に の高きを

【語釈】

○江北江南…長江中下流の北岸、南岸地方。○平生…常日頃。○東風…春風。○燕雀…燕や雀などの小鳥。

## ★聞雁 　　　　　　　雁を聞く　　　　　　　　　　　　　　元

月落江城轉四更　　　月落ちて 江城 四更に転ず

旅魂和夢到灤京　　　 夢に和して に到る

醒來獨背寒燈坐　　　め来たりて 独り 寒燈にいて坐す

風送長空雁幾聲　　　風は送る 長空

【語釈】

○江城…川辺にある街。○四更…午前一時～三時頃。○旅魂…旅情。○灤京…上都。元のクビライが、モンゴル高原南部に設けた都。○寒燈…寒々とした灯火。○幾聲…多数の声。

## ★聞鴈寄董莊 を聞き に寄す　　　　　　　　　明

晚意秋隂兩不分　　　 つながら分たず

渚蘆沙竹護寒雲　　　 寒雲を護る

鴈聲客裏誰先聽　　　鴈声 誰かず聽く

愁絶惟應我共君　　　愁絶 だに 我と君と共となるべし

【語釈】

○董莊…不祥。○晚意…夕方の気配。○秋隂…秋の寒さ。○渚蘆…渚のアシ。○沙竹…砂浜の竹。○客裏…旅の途中。○愁絶…非常に心を痛める。○應…まさに～すべし」と読み「きっと～であるに違いない」の意。

# 蟋蟀絡緯 金鐘児紡績娘

## ★聞蟲 　虫を聞く　　　　　　　　　　　　　　　唐

暗蟲唧唧夜綿綿　　　暗虫として 夜 たり

況是秋陰欲雨天　　　況や是れ 秋陰 雨ふらんと欲する天なるをや

猶恐愁人暫得睡　　　お恐る 愁人 くも 睡りを得ることを

聲聲移近臥牀前　　　　移り近ずく の前

【語釈】

○暗蟲…暗いところで鳴く虫。○唧唧…虫の鳴くさま。チーチー。○綿綿…長く続くさま。○秋陰…秋の曇り。○臥牀…寝床。

## ★促織　　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　　唐

念爾無機自有情　　　う が 無くして ずから情有るを

迎寒辛苦弄梭聲　　　寒を迎えて 辛苦 をす

椒房金屋何曾識　　　 何ぞ てらん

偏向貧家壁下鳴　　　に 貧家の 壁下にいて鳴く

【語釈】

○促織…コオロギ。○念爾…爾を思う。○無機…自然に任す。○梭…機織り機のヒ。○椒房…后妃の住む部屋。○金屋…華美な部屋。

## ★山間秋夜　　　　 山間の秋夜　　　　　　　　　　　　　　宋

夜色秋光共一闌　　　 共に

飽收風露入脾肝　　　飽くまで 風露を收めて に入る

虛簷立盡梧桐影　　　 立ち尽くす の影

絡緯數聲山月寒　　　 数声 山月 寒し

【語釈】

○夜色…夜の気配。○秋光…秋の月の光。○一闌…一つの欄干。闌は欄に同じ。○風露…秋の風と露。○虚檐…誰もいない軒、縁側。○梧桐…青桐。○絡緯…こおろぎ、くつわむし。

（参考文献）　『漢詩鑑賞辞典』

## ★江邨 　　　　 江村　　　　　　　　　　　　　　　　明

汀葦蒼蒼白露凝　　　 白露 る

一灘寒月未收罾　　　の寒月 未だを收めず

西風吹醒江南夢　　　西風 吹きまず 江南の夢

四壁蛩聲半夜燈　　　四壁の 半夜の灯

【語釈】

○蒼蒼…盛んに茂るさま。○罾…四つ手あみ。○西風…秋風。○江南…長江下流の南岸地方。○蛩聲…コオロギの声。

## ★絡緯　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　元

牽牛風露滿籬根　　　の風露 籬根に満つ

淡月疎星夜未分　　　 夜 未だ分せず

燈下有人抛錦字　　　灯下 人有り 錦字を抛うち

機絲零亂不成文　　　 して を成さず

【語釈】

○牽牛…牽牛花。アサガオ。○風露…風と露。○籬根…垣根。○錦字…蘇蕙の回文詩の故事。○機絲…機織り機の糸。○零亂…ゆらゆら動く。

# ◆巻七　　冬　　　（雪）

## ★休暇日訪王侍御不遇　　休暇の日を訪ねて遇わず 　　 唐

九日驅馳一日閑　　　九日して 一日なり

尋君不遇又空還　　　君を尋ねて 遇わず 又 空しくえる

怪來詩思清人骨　　　怪み来たる 詩思の 人骨を清むるを

門對寒流雪滿山　　　門は寒流に対し 雪は山に満つ

【語釈】

○侍御…皇帝の側に使える人。○驅馳…走り回ること（当時の役人は，９日働き、１日休暇であった）。○怪來…あやしむ（「來」は助辞）。○詩思…詩を作ろうと思う心。○人骨…人。

（参考文献）　『三体詩』

## ★酬王二十舍人雪中見寄　王二十舍人が雪中に寄せらるるに酬ゆ　 唐

三日柴門擁不開　　　三日 して開かず

階平庭滿白皚皚　　　階 平らかに 庭に満ち 白

今朝蹋作瓊瑤跡　　　 みて の跡をすは

爲有詩從鳳沼來　　　詩の り 来たる有る為なり

【語釈】

○王二十舍人…王涯。唐の太原の人，司空にまでなったが、甘露の変で殺害された。○柴門…柴で作った粗末な門。○階…きざはし。○皚皚…雪や霜の白いさま。○瓊瑤…美しい珠。ここでは雪のこと。○鳳沼…超俗の地。

## ★宮詞 　 宮詞 　 唐

五更初起覺風寒　　　五更 初めて起きて 風の寒きを覚ゆ

香炷燒來夜已殘　　　 焼き来たれば 夜 已にす

欲卷珠簾驚雪滿　　　を卷かんと欲して 雪の満つるに驚き

自將紅燭上樓看　　　ら をって 楼に上りて看る

【語釈】

○宮詞…宮中の物事を詠じた詩。○五更…夜明け前。○香炷…香を焚くこと。○殘…尽きようとしているさま。○珠簾…たますだれ。

## ★霽雪　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 唐

風卷寒雲暮雪晴　　　風は寒雲を卷きて 暮雪 晴る

江煙洗盡柳條輕　　　江煙 洗い尽きて 柳條 軽ろし

簷前數片無人埽　　　の数片 人のう無く

又得書窗一夜明　　　又 書窓 一夜のを得たり

【語釈】

○江煙…水の上に立つ靄。○柳条…柳の枝。○簷前…軒の前。

## ★憶住一師　　　　　を憶う　　　　　　　　　　　　　 唐

無事經年別遠公　　　無事 経年 遠公に別る

帝城鐘曉憶西峰　　　帝城 鐘て 西峰を憶う

爐煙消盡寒燈晦　　　炉煙 消尽くし 寒燈し

童子開門雪滿松　 　　童子 門を開けば 雪 松に満つ

【語釈】

○住一師…不祥。○遠公…晉の高僧慧遠。廬山の東林寺に居住した。○帝城…帝都長安。○炉煙…香炉の煙。

## ★寄鄰莊道侶　　　　のに寄す　　　　　　　　　　  唐

聞說經旬不啓關　　　く 関をかずと

藥窗誰伴醉開顏　　　薬窓 誰か伴いて 酔いて顏を開く

夜來雪壓村前竹　　　夜来 雪は圧す 村前の竹

賸見溪南幾尺山　　　し見る 溪南 幾尺の山

【語釈】

○道侶…修行中の同僚。○聞說…聞くところによれば。○經旬…十日余り。○啓關…門を開く。○夜来…夜になってから。○賸見…いたずらに見る。

## ★雪中偶題　　　　　雪中の偶題 　　　　　　　　　　　　　 唐

亂飄僧舍茶煙溼　　　乱れて僧舍にりて 茶煙い

密灑歌樓酒力微　　　密に歌楼にぎて 酒力かなり

江上晚來堪畫處　　　江上 晚来 画くに堪えたる処

漁人披得一蓑歸　　　漁人 をし得て帰る

【語釈】

○僧舍…寺院。○茶煙…茶を煮る煙。○歌樓…歌舞を行う楼。○酒力…酒の人を酔わせる力。○晚來…夕方になってから。

## ★雪意　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 宋

向晚浮雲四面平　　　に向いて 浮雲 四面に平かなり

北風號怒達天明　　　北風 して に達す

寒窗一夜清無睡　　　寒窓 一夜　清くして　睡ること無し

擬聽杉篁葉上聲　　　聽かんとす の声

【語釈】

○北風…冬風。○號怒…怒号。○天明…夜明け。○杉篁…杉と竹。

## ★雪中　　　　　　　雪中　　　　　　　　　　　　　　　　 宋

曉來紅日尚羞明　　　 紅日 尚お明を羞ず

四外彤雲欲**放**晴　　　の 晴を放たんと欲す

一夜九天開玉闕　　　一夜 九天 を開き

六花萬里散璚英　　　 万里 を散ず

【語釈】

○曉來…夜明けになってから。○紅日…赤色の光を放つ太陽。○羞明…明るい光に対する恐怖。○四外…四方。○彤雲…紅雲。彩雲。○九天…大空。○玉闕…天帝が住む宮殿の門。○六花…雪。○璚英…玉に似た美しい石。

## ★冬日早作　　　　　冬日早作　　　　　　　　　　　　　　 宋

黄昏月姊翦雲開　　　 雲をりて開き

夜半雷車載雨來　　　夜半 雨を載せて来たる

晨起鈎簾望霄漢　　　に起き をして を望めば

風花吹墮萬璚瑰　　　風花 吹き墮とす

【語釈】

○黄昏…たそがれ。○月姊…月。月光。○雷車…雷神を載せた車。雷声。○鈎簾…簾を捲き上げて鈎にかける。○霄漢…天空。○萬璚瑰…多くの玉に似た美しい石。

## ★雪　　　　　　　　雪　　　　　　　　　　　　　　　　　　 金

蔌蔌天花落未休　　　たる 天花 未だ落ちてまず

寒梅疎竹共風流　　　寒梅 共に風流

江山一色三千里　　　江山 一色 三千里

酒力消時正倚樓　　　酒力 消える時 正に 楼に倚る

【語釈】

○蔌蔌…花が落ちるさま。○天花…雪。○江山…江と山。○酒力…酒が人を酔わす力。

## ★雪　　　　　　　 　雪　　　　　　　　　　　　　　　　　 金

隨風拂拂玉花飄　　　風に隨いて 玉花 る

入夜寒窗更寂寥　　　夜に入りて 寒窓 更に寂寥

爐火已殘燈未燼　　　炉火 已にして 灯 未だきず

一簾疎竹白蕭蕭　　　の疎竹 白

【語釈】

○拂拂…散布するさま。○玉花…白い花。ここでは雪。○寂寥…ひっそりとして物寂しいさま。○殘…損なわれる。○燼…燃え尽きる。○一簾…ひとかたまり。○蕭蕭…物寂しいさま。

## ★題江皋雪霽卷 　の卷に題す 　元

山川玉潔映朝暉　　　山川 朝暉に映ず

人世鴻濛果是非　　　人世 に是か非か

只許詩家占清景　　　只だ許す 詩家の 清景を占むるを

漁蓑偷載一船歸　　　漁蓑 に載せて 一船帰る

【語釈】

○江皋…江岸、江辺。○雪霽…雪が降った後の晴れ。○玉潔…純白で疵の無いさま。○朝暉…朝日。○鴻濛…天地が別れる前のようにカオスの状態。○清景…清らかな景色。○漁蓑…蓑を着た漁師。

## ★冬暖 冬暖 元

冬令偷春多得暖　　　冬令 春をみて 多く暖を得たり

灞橋無思可吟詩　　　 思いの 詩を吟ずべき無し

江梅一樹都開遍　　　江梅 一樹 てす

不問南枝與北枝　　　問わず南枝と北枝とを

【語釈】

○冬令…冬を司る神。○灞橋…長安の東の灞上に架かる橋。東に旅立つ人との別れの地。○開遍…遍く開く。

## ★四景　　　　　　　四景　　　　　　　　　　　　　　　　 明

池頭六出花飛遍　　　池頭の 花の飛ぶことし

池水無波凍欲平　　　池水 波無く 平かならんと欲す

一望玻璃三百頃　　　一望の 三百

好山西北玉為屏　　　好山 西北 玉をと為す

【語釈】

○池頭…池のほとり。○六出…雪。○一望…見渡す限り。○玻璃…水晶に似た宝石。

## ★宮詞　　　　　　　宮詞　　　　　　　　　　　　　　　　 明

白雪漫漫積禁隄　　　白雪　 にる

夜寒宮月照玻璃　　　夜 寒くして 宮月 を照らす

曉來宮女喧看處　　　 宮女 しく看る処

掃向盤中捏狻貎　　　いて 盤中にいて をす

【語釈】

○漫漫…広く遙かなさま。○禁隄…禁中の堤。○宮月…宮城に臨む月。○玻璃…水晶のような宝石。ここでは雪。○曉來…暁になってから。○狻貎…伝説上の動物。獅子。○捏…ここでは雪で形作ること。

## ★寒夜　　　　　　　寒夜 　　　　　　　　　　　　　　　　 明

破屋難禁深夜雨　　　破屋 ぎ難し 深夜の雨

布衾寒湿半床雲　　　 寒にう 半床の雲

愁来自起推窗看　　　愁い来たりて ら起きて 窓を推して看れば

人比梅花瘦幾分　　　人は 梅花に比して 瘦せること幾分

【語釈】

○破屋…壊れた家。○布衾…布で作った夜具。○幾分…多少。

## ★雜言 　雑言 明

凍雲寒樹曉模糊　　　 寒樹 曉にたり

水上樓臺似畫圖　　　水上の楼台 画図に似たり

紅袖誰家乘小艇　　　 誰が家ぞ 小艇にじ

捲簾看雪過鴛湖　　　を捲き 雪を看て を過ぐ

【語釈】

○雜言…よもやまの事を詠った詩。○模糊…はっきりしないさま。ぼんやりしているさま。○紅袖…赤い袖で転じて美人。○鴛湖…浙江省嘉興の西南にある湖。湖中に煙雨楼がある。

## ★飲秋澗隠居夜歸值雪有作　　　　　　　　　　　　　　　　　明

　　　　　　　　　　　のにし 夜帰る 雪にいて作有り

獨行長路儼如僧　　　独り行く長路 として僧の如し

水滴簷牙半是冰　　　水はよりり 半ば れ 氷る

歸到空園人已**静**　　　空園に帰り到れば 人 已に静かに

雪花穿戶打殘燈　　　 戶をがち 残灯を打つ

【語釈】

○秋澗…姚淛。浙江省杭州の人。若くして学に優れ、鴻臚卿に任ぜられたが、すぐに辞職して隠棲した。○簷牙…軒の突き出た部分。○空園…人気の無い園。○殘燈…消えかかった灯。

## ★雪中訪嘉則於寶奎寺之樓店　　　　　　　　　　　　　　　　明

　　　　　　雪中 をの楼店にう

山徑尋君重復重　　　山径 君を尋ね 復た

小樓百尺臥元龍　　　小楼 百尺 を臥さしむ

安窓偏向梅花角　　　窓をいて に向う 梅花の角

去暎江天雪數峰　　　去りて映ず 江天の 雪 数峰

【語釈】

○嘉則…沈明臣。浙江省鄞県の人，胡宗憲の幕僚となる。詩名有り。○寶奎寺…不祥。○樓店…楼房の店舗。○重復重…重なり合うさま。○元龍…道教用語で道を得た者。○江天…江と空。

# 十月

## ★和襲美初冬偶作 の に和す  唐

桐下空階疊綠錢　　　の空階 をみ

貂裘初綻擁高眠　　　 初めてび 高眠をす

小爐低幌還遮掩　　　小炉 た遮掩

酒滴**清**香似去年　　　酒滴の清香 去年に似たり

【語釈】

○襲美…皮日休。湖北省襄陽市の人太常博士、翰林學士となる。○空階…人気の無いきざはし。○綠錢…緑の苔。○貂裘…貂の皮でつくったかわごろも。○低幌…低い幌。○遮掩…覆い遮る。○酒滴…酒のしずく。

## ★南中感懷　　　　　南中感懷　　　　　　　　　　　　　　　唐

南路蹉跎客未回　　　南路 として 未だらず

常嗟物候暗相催　　　常にす 物候の 暗にすを

四時不變江頭草　　　四時 変せず 江頭の草

十月先開嶺上梅　　　十月 先ず開く の梅

【語釈】

○南中…南の地方。○蹉跎…生活が思うようにいかない。○物候…一年の季節。○四時…四季。○江頭…江のほとり。

## ★初冬　　　　　　　初冬　　　　　　　　　　　　　　　　宋

荷盡已無擎雨蓋　　　は尽きて 已に 雨をぐる無く

菊殘猶有傲霜枝　　　菊はして お 霜にる枝 有り

一年好景君須記　　　一年の好景 君 らく記すべし

正是橙黄橘綠時　　　に 是れ の時

【語釈】

○劉景文…名は季孫、景文は字。タングート族の西夏と戦った将軍劉平の子で、このとき、杭州で民兵を率いていた。○荷盡…蓮の葉がすっかり枯れてしまった。○擎…高く差し上げること。○蓋…かさ。○菊殘…菊が盛りを過ぎて咲き衰えたこと。○傲霜…霜に負けない。○須…すべからく～すべしと読み、当然～すべきであるの意。○橙…ユズ。○橘…ミカンの類。

（参考文献）　漢詩大系１７』

## ★小春花　　　　　　小春の花　　　　　　　　　　　　　　　　宋

天地無情正北風　　　天地 無く に北風

飛鴻哀咽亂雲中　　　 す 乱雲の

此時縱使開千樹　　　此の時 千樹を開くも

不及東皇一點紅　　　 一点の紅に及ばず

【語釈】

○小春…小春日和。○飛鴻…空を飛ぶ雁。○哀咽…哀れに咽び鳴く。○東皇…春の神。

## ★十月 　　　　　　 十月　　　　　　　　　　　　　　　　元

清霜欲重小春天　　　清霜 重ならんと欲す 小春の天

楊柳蕭疏帶曉煙　　　楊柳 を帯ぶ

無奈東皇苦多事　　　ともする無し だ 多事なるを

又傳春信到梅邊　　　又 を伝えて に到る

【語釈】

○小春…小春日和。○蕭疏…疎らで少ない。○曉煙…朝靄。○東皇…春をつかさどる神。○多事…することが多い。○春信…春の来た知らせ。

## ★立冬　　　　　　　立冬 　　　　　　　　　　　　　　　　明

秋風吹盡舊庭柯　　　秋風 吹き尽くす 旧庭の

黃葉丹楓客裏過　　　黃葉 丹楓 に過ぐ

一點禪燈半輪月　　　一点の禅灯 半輪の月

今宵寒較昨宵多　　　の寒は にぶれば 多し

【語釈】

○柯…木の枝。○丹楓…紅葉した楓。○客裏…旅の中。○禅灯…寺廟の灯火。

# 巻八　　　十一月

## ★冬至日獨遊吉祥寺　　冬至の日独り吉祥寺に遊ぶ　　　　　宋

井底微陽回未回　　　の微陽 るか 未だらざるか

蕭蕭寒雨濕枯荄　　　たる寒雨 をす

何人更似蘇夫子　　　何人か 更に に似て

不是花時肯獨來　　　是れ 花時ならざるに 肯えて独り来る

【語釈】

○吉祥寺…江蘇省杭州市にあった寺。○井底…井戸の底。○微陽…微かな陽気。○蕭蕭…風雨等の物寂しい音の形容。○枯荄…枯れた草の根。○蘇夫子…蘇軾。

（参考文献）　『漢詩大系　１７』

## ★冬至後十餘日復至吉祥寺 　　　　　　　　　　　　　　　宋

　　　　　　　　冬至の後十余日復び吉祥寺に至る

東君意淺著寒梅　　　 意浅し 寒梅をくるに

千朵深紅未暇裁　　　の深紅 未だ裁うるに 暇あらず

安得道人殷七七　　　んぞ得ん 道人の殷七七

不論時節遣花開　　　時節を論ぜず 花を開かしむるを

【語釈】

○吉祥寺…江蘇省杭州市にあった寺。○東君…春を司る神。○千朵…多くの花を付けた枝。○深紅…赤い花。○道人…道教の師。○殷七七…道荃、祥という唐代の道教の師。９月にツツジの花を開く技を試したという。

## ★至節即事　　　　 の即事　　　　　　　　　　　　　　元

天街曉色瑞煙濃　　　天街の曉色 濃く

名紙相傳盡賀冬　　　名紙 相伝えて く 冬を賀す

繡幕家家渾不卷　　　 て卷かず

呼盧笑語自從容　　　 笑語 ら従容す

【語釈】

○至節…夏至又は冬至。この場合は冬至。冬至は一陽来復の日として祝われ、徹夜をする習慣があった。○即事…事に触れて、その場のことを題材にして作った詩。○天街…京城中の道路。○曉色…曉の景色。○瑞煙…めでたい霞。○名紙…名刺。○繡幕…刺繍をしたカーテン。○呼盧…博打のかけ声。

## ★至節即事　　　　 の即事　　　　　　　　　　　　　　元

店舍喧譁徹夜開　　　の 夜を徹して開く

熒煌燈火映樓臺　　　たる燈火 楼台に映ず

歡遊未曉不歸去　　　 未だけざれば 帰り去らず

早有元宵氣象來　　　早く の気象の 来たる有り

【語釈】

○至節…夏至又は冬至。この場合は冬至。冬至は一陽来復の日として祝われ、徹夜をする習慣があった。○即事…事に触れて、その場のことを題材にして作った詩。○喧譁…かまびすしさ。○熒煌…光輝く。○歡遊…歓び遊ぶ人々。○元宵…正月十五日、上元節。この夜灯火をともして騒いだ。○氣象…景色。

## ★長安冬至　　　　　長安の冬至 　　　　　　　　　　　　　明

子月風光雪後看　　　の風光 雪後に看る

新陽一縷動長安　　　新陽 長安に動く

禁鍾乍應雲門曲　　　禁鍾 ち応ず 雲門の曲

宮樹先驅黍谷寒　　　宮樹 先駆くる の寒

【語釈】

○子月…旧暦１１月。○風光…風景。○新陽…初春。○一縷…わずか。○禁鍾…禁中の鐘。○雲門曲…周の六舞曲の一つ。○黍谷…北京市密雲県の西南にある山谷。

# 十二月

## ★除夜作 　　　　　 除夜の作　　　　　　　　　　　　　　　唐

旅館寒燈獨不眠　　　旅館の寒灯 独り眠らず

客心何事轉悽然　　　 何事ぞ た

故鄉今夜思千里　　　故鄉 今夜 千里を思う

霜鬢明朝又一年　　　 明朝 又 一年

【語釈】

○寒灯 … 薄暗く、寒々とした灯。○客心 … 旅人の心。○何事 … どうしたことか。○転 … いよいよ。ますます。○悽然 … 物寂しいさま。痛ましいさま。○霜鬢 … 霜のような白い鬢。○又一年 …一つ年をとる。

（参考文献）　『漢詩鑑賞辞典』『唐詩選』

## ★除夜　　　　　　  除夜　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

病眼少眠非守歲　　　病眼 眠 少くして 歲を守るに非らず

老心多感又臨春　　　老心 感 多くして 又 春に臨む

火銷燈盡天明後　　　火はし 灯は尽く 天明の後

便是平頭六十人　　　便ち 是れ 平頭 六十の人

【語釈】

○守歲…除夜に眠らないでいる習慣。○天明…夜明け。○平頭…数のそろうこと。

## ★春近　　　　　　　春近し　　　　　　　　　　　　　　　 宋

閏後陽和臘裏回　　　閏後 陽和 にり

濛濛小雨暗樓臺　　　たる小雨 楼台に暗し

柳條榆莢弄顔色　　　柳條 顔色をし

便恐入簾雙燕來　　　ち恐る に入りて 双燕のることを

【語釈】

○閏後…うるう月の後。○陽和…春天の暖気。○臘裏…陰暦十二月の中。○濛濛…煙るようにもやっとしているさま。○柳條…柳の枝。○榆莢…ニレの実。○雙燕…つがいの燕。

## ★春近　　　　　　　春近し　　　　　　　　　　　　　　　 宋

亭臺經雨壓塵沙　　　亭台 雨を経て を圧す

春近登臨意氣佳　　　春近く して 意気 なり

更喜輕寒勒成雪　　　更に喜ぶ 雪を成すをめ

未春先放一城花　　　未だ 春ならざるに 先ず一城の花を放つを

【語釈】

○塵沙…砂塵。○登臨…高所に登って下を見渡すこと。○輕寒…微かな寒さ。○勒…統率して止める。

## ★春近　　　　　　　春近し　　　　　　　　　　　　　　　 宋

小雪晴沙不作泥　　　 泥を作さず

疏簾紅日弄朝暉　　　 をす

年華已伴梅梢晚　　　年華 已に に伴いて れ

春色先從草際歸　　　春色 先ず り帰る

【語釈】

○小雪…二十四節季の一つ、陽暦の十一月二十三日ころ。○晴沙…日光の照らす砂浜。○疏簾…粗く編んだすだれ。○紅日…赤い日の光。○朝暉…朝日。○年華…年。○梅梢…梅のこずえ。

## ★春近　　　　　　　春近し　　　　　　　　　　　　　　　 宋

梅英欲盡香無頼　　　 尽きんと欲し 香 なり

草色才蘇綠未勻　　　草色 かに の緑 未だかならず

苦竹空將歲寒節　　　苦竹 空しく 歲寒の節をちて

又隨官柳到青春　　　又 官柳に随いて 青春に到る

【語釈】

○梅英…梅花。○無頼…たよりない。○蘇…シソ科の一年草。○勻…ととのう。○苦竹…まだけ。○歲寒節…冬の季節。○官柳…公道に植えられた柳。

## ★臘月下旬偶作 下旬の偶作　　　　　　 　　　宋

歲暮烟霜澤國寒　　　 寒し

曉鴉鳴處是柯山　　　 鳴く処 是れ

地爐有火樽餘酒　　　 火有りて 酒を余す

自起焚香深掩關　　　ずから 起きて 香をき 深く関を掩う

【語釈】

○臘月…陰暦十二月。○歲暮…年の暮。○烟霜…靄と霜。○澤國…水郷。○曉鴉…曉の鴉。○柯山…不確定。○地爐…地下に設けた暖炉。○掩關…門を閉ざす。

## ★歲晚書事　　　　　歲晚に事を書す　　　　　　　　　 　　宋

荒苔野蔓上籬笆　　　 に上り

客至多疑不在家　　　 至りて 多く疑う 家に在らざるかと

病眼看人殊草草　　　病眼 人を看る 殊に

隔林迢遞見梅花　　　林を隔だてて 梅花を見る

【語釈】

○歲晚…大晦日。○荒苔…荒れた苔。○野蔓…野生のつる草。○籬笆…竹、小枝などで作られた垣根。○草草…苦労するさま。○迢遞…遠くに。

## ★歲晚書事　　　　　歲晚に事を書す　　　　　　　　　　　 宋

細君炊秫婢繰絲　　　細君はを炊き 婢は糸を繰る

綵勝酥花總不知　　　 総べて知らず

窗下老儒衣露肘　　　窓下の老儒 衣 肘をす

挑燈自揀一年詩　　　灯をげて らぶ 一年の詩

【語釈】

○歲晚…大晦日。○細君…妻。○綵勝…？○酥花…梅花。○老儒…年老いた学者。

## ★歲晚書事　　　　　歲晚に事を書す　　　　　　　　　 　　宋

門冷如冰儘不妨　　　門は冷にして氷の如きなるもな妨げず

由來富貴屬蒼蒼　　　由来 富貴 に属す

誰能却學癡兒女　　　誰か能く却って痴兒女に学び

深夜潜燒祭竈香　　　深夜 潜かに 祭竈香を燒く

【語釈】

○歲晚…大晦日。○儘…そのままにしておく。○由来…もともと。○蒼蒼…青い天。ここでは天の思し召し。○祭竈香…かまどを祀る香。

## ★歲晚書事　　　　　歲晚に事を書す　　　　　　　　　　　 宋

丐客鶉衣立戸前　　　 戸前に立つ

豈知儂自窘殘年　　　に知らんや はから残年をしむを

染人酒媼逋猶緩　　　 のは 猶お緩かに

且送添丁上學錢　　　くを送り 学に上る銭

【語釈】

○歲晚…大晦日。○丐客…乞食。○鶉衣…破れ衣。○染人…染め物工。○酒媼…酒を売る老婆。○逋…租税を滞納する。○添丁…男の子。○上學…学問を修めるための金。

## ★土牛 　土牛 明

刻木團泥作禍胎　　　木をし 泥をして をす

驅牽不動蠢形骸　　　 動かず 形骸をかす

須臾齏粉渠休恨　　　に 渠 恨むることをめよ

教汝偷寒送暖來　　　汝をして寒をしみ暖を送り来らしむ

【語釈】

○土牛…粘土で作られた牛。陰の気を取り除くために、陰暦十二月に土製の牛が作られた。○禍胎…禍根。○驅牽…駆動したり牽いたりすること。○形骸…体。○齏粉…粉砕。

## ★十二月二十七日作 十二月二十七日の作 明

三日半存何必戀　　　三日半ば 存す 何ぞ必ずしも 恋わん

一年去盡不知留　　　一年 去り尽きて 留むることを 知らず

春風只在虞山外　　　春風 只だ在り の

嫋嫋將來笑白頭　　　 に来たりて 白頭を笑わんとす

【語釈】

○虞山…江蘇省蘇州市の虞山。○嫋嫋…しなやかで美しいさま。○將…「まさに～せんとす」と読み「今にも～しそうである」の意。○白頭…しらが頭。

# 附録　鴛鴦 鸂鶒

## ★除夕 　除夕 明

久客懷人百事慵　　　 人を懷いて 百事し

春歸幾日是殘鼕　　　春帰り 幾日 是れ

長安雪後無來往　　　長安 雪後 無し

報國門前獨看松　　　 独り松を看る

【語釈】

○除夕…大晦日の夜。○久客…長く逗留する旅人。○春歸…春が過ぎ去る。○殘冬…冬の終わり。○來往…人の行き来。○報國門…長安の城門の一つ、不祥。

## ★鴛鴦　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

雌去雄飛萬里天　　　雌去り 雄飛ぶ 万里の天

雲羅滿眼淚潸然　　　 眼に満ちて淚

不須長結風波願　　　いず 長く 風波の願いを 結ぶことを

鎖向金籠始兩全　　　して 金籠にいて 始めて両全

【語釈】

○雲羅…網の目のように空に広がる雲。○潸然…涙が流れるさま。ハラハラ。○金籠…金の鳥籠。

## ★鸂鶒  　 唐

錦羽相呼暮沙曲　　　 相呼ぶ の

波上雙聲戛哀玉　　　波上の双声 をす

霞明川靜極望中　　　霞明かに 川静かに 極望の

一時飛滅青山綠　　　一時にし 青山 緑なり

【語釈】

○鸂鶒…オシドリに似た水鳥の一種。○錦羽…羽毛の美称。○暮沙…夕方の砂浜。○哀玉…翡翠の音のように悲惨な音。○戛…金石を叩いて音を出す。○極望…見渡す限り。○飛滅…飛び去って見えなくなること。

## ★鴛鴦　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

翠翹紅頸覆金衣　　　 をう

灘上雙雙去又歸　　　 双々 去りて 又帰る

長短死生無兩處　　　長短 死生 無し

可憐黃鵠愛分飛　　　憐むべし の を愛すを

【語釈】

○鴛鴦…おしどり。○翠翹…緑色の尾にある長い羽。○紅頸…赤い首。○金衣…金色の羽毛。○灘上…早瀬の上。○雙雙…つがいになって。○黃鵠…大鳥の名。黄色い羽をもつ。○分飛…雌雄別れて飛ぶ。

## ★鴛鴦　　　　　　　鴛鴦　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

江島濛濛煙靄微　　　 なり

綠蕪深處刷毛衣　　　 深き処 毛衣をう

渡頭驚起一雙去　　　 驚き起ちて 一双去り

飛上文君舊錦機　　　飛び上る 文君が

【語釈】

○鴛鴦…おしどり。○江島…江の中の島。○濛濛…煙るようにぼおっとしているさま。○煙靄…霞と靄。○綠蕪…青々と茂っている雑草。○毛衣…羽毛。○渡頭…渡し場。○一双…ひとつがい。○文君…卓文君。司馬相如の妻。ウィキペディア。○錦機…錦織機。

## ★荆溪夜泊　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　唐

點點漁燈照浪清　　　点々たる漁灯 浪を照らして清し

水烟疏碧月朧明　　　水煙 にして 明かなり

小灘驚起鴛鴦處　　　 を 驚き起たする処

一隻採蓮船過聲　　　一隻の の 過ぐる声

【語釈】

○荆溪…江蘇省常州市荆溪。○水煙…水面に立つもや。○疎碧…疎らな青緑色。○月朧…おぼろ月。○驚起…驚かせて飛び立たせる。○鴛鴦…おしどり。○採蓮船…蓮を採る船。

## ★鴛鴦　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宋

蘋洲花嶼接江湖　　　 江湖に接す

頭白成雙得自如　　　頭白 を成してを得たり

春晩有時描一對　　　春晩 時有りて 一対を描く

日長消盡繡工夫　　　日長くして 消尽す

【語釈】

○鴛鴦…オシドリ。○蘋洲…浮き草が岸に生えている中洲。○花嶼…花の咲いている島。○成雙…つがいとなる。○自如…自若。○春晩…晩春。○消盡…使い果たす。○繡工夫…刺繍の苦労。

## ★題馬賁畫鸂鶒圖　　　が画けるの図に題す 　　　　　金

雙眠雙浴水平溪　　　双眠 双浴 水 溪に平かなり

共㸔秋光卧兩堤　　　共に秋光を看て両堤にす

誰信瀟湘有孤鴈　　　誰か信ぜん に 有りて

冷沙寒葦不成棲　　　 を成さざるを

【語釈】

○馬賁…不祥。○鸂鶒…オシドリ。○双眠…つがいで眠る。○双浴…つがいで水浴びをする。○秋光…秋景色。○瀟湘…瀟水と湘水が合流する洞庭湖南の地方。○孤鴈…群れから離れた鳫。○冷沙…冷たい砂浜。○寒葦…寒々としたアシ。

## ★題宋徽宗雙鴛圖　　ののの図に題す 　　　　　　　明

蘆葉青青水滿塘　　　青々として 水 塘に満つ

文鴛晴卧落花香　　　 にして 落花 し

不因羌管驚飛起　　　の 驚飛し 起すに らず

三十六宮春夢長　　　三十六宮 春夢 長からん

【語釈】

○徽宗…北宋の第8代皇帝。芸術家としては優れていたが政治的には無能で、靖康の変に繋がった。○雙鴛…つがいのオシドリ。○蘆葉…アシの葉。○文鴛…オシドリ。○羌管…羌笛。異民族の笛。○三十六宮…多くの宮殿。

## ★小鴨 　　　　　　  　　　　　　　　　　　　　　　　宋

小鴨看從筆下生　　　 り 生ずるを看る

幻法生機全得妙　　　 全く妙を得たり

自知力小畏滄波　　　ずから 知る 力 小にして をるを

睡起晴沙依晚照　　　して に依る

【語釈】

○小鴨…小さな鴨。○筆下…絵筆の下。○幻法…魔法。○生機…生理機能。○睡起…眠りから醒める。○晴沙…晴れた砂浜。○晚照…夕映え。

## ★春日　　　　　　　春日　　　　　　　　　　　　　　　　宋

陰陰溪曲綠交加　　　陰々たる溪曲 緑 す

小雨翻萍上淺沙　　　小雨 をして に上る

春色不堪流水送　　　春色 流水を送るに 堪えず

雙浮鳴鴨趁桃花　　　つ浮ぶ 桃花をう

【語釈】

○陰陰…木が茂って暗いさま。○溪曲…谷のくま。○交加…入り交じる。○萍…うきくさ。○淺沙…浅い砂浜。○鵝鴨…あひるとカモメ。○趁…追いかける。

## ★登浄遠亭 　　　　 に登る　　　　　　　　　　　　宋

池冰受日未全開　　　 日を受け 未だ全くは開かず

旋旋波痕百皺來　　　たる波痕 来たる

野鴨被人驚得慣　　　 人に驚かれ慣れるを得て

作羣飛去却飛回　　　群を作し 飛び去り 却って飛びえる

【語釈】

○浄遠亭…不祥。○池冰…池に張った氷。○開…解ける。○旋旋…やや、ゆったりしたさま。○百皺…多くのさざ波。○得慣…慣れることができた。

# 鳬 鴨

## ★凍鳧　　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　　　　明

江天歲晚景淒淒　　　江天 歲晚 景

雲脚低垂望欲迷　　　 低く垂れ 迷わんと欲す

水鳥畏寒飛不起　　　水鳥 を畏れ　飛びたず

黃蘆枝上並頭棲　　　 して棲む

【語釈】

○凍鳧…凍えたケリ（小型の鴨）。○江天…江と天。○歲晚…年の暮れ。○淒淒…冷え冷えとしたさま。○雲脚…雲から垂れ下がった雨。○黃蘆…枯れて黄色くなったアシ。○並頭…頭を並べて。

## ★題梨花睡鴨圖　　　の図に題す　　　　　　　　　唐

昔年家住太湖西　　　 家は太湖の西にす

常過吳興罨畫溪　　　常に過ぐ の

水閣筠簾春似海　　　水閣 春 海に似たり

梨花影裏睡鳧鷖　　　 睡る

【語釈】

○太湖…江蘇省蘇州市近くにある湖。○呉興…浙江省の県名。○罨畫溪…不祥。○水閣…川に臨んだ閣。○筠簾…竹のすだれ。○鳧鷖…ケリ（小型の鴨）と鴨。